周囲の環境が個人に与える影響力

――学生が卒業論文作成を行う上での公的問題とは――

学籍番号：12042016

名前：石田尚輝

指導教員：立木茂雄

目次

第 1 章　　序論――研究動機

第 2 章　　先行研究から――調査と調査結果の捉え方
2.1　個人と社会の関係
2.2　集団と社会の関係

第 3 章　　インタビュー調査
3.1　調査方法
3.2　質問とその回答結果Ⅰ
3.3　質問とその回答結果Ⅱ

第 4 章　　調査結果考察①
4.1　項目別分類
4.2　分類からⅠ――少ない物理問題
4.3　分類からⅡ――「内面問題」と「意識影響」の関係
4.4　分類からⅢ――「対人」と「それ以外」の意識影響
4.5　分類からⅣ――最も強い「意識影響―対人」とは？
4.6　考察まとめ

第 5 章　　調査結果考察②
5.1　消極的な意識を形成する要因とは？
5.2　卒論着手以前の意識影響について
5.3　学生生活の中での意識影響「向学グラフ」
5.4　グラフ考察
5.5　考察まとめ

第 6 章　　おわりに

参考文献

要旨

私は、自らの卒業論文作成が遅れてしまったことと平行し、周囲の友人も私と同様に遅れてしまっている場合が多いと感じ、このテーマに興味を持った（第 1 章）。

先行研究として C・ライト・ミルズ著『社会学的想像力』を参考にした。その中から、私が扱おうとしている問題は、一個人の内部で発生している「私的問題」ではなく、特定個人の限られた環境や、内面生活の範囲を超えた「公的問題」であることがわかった。卒業論文作成が遅れているのは「私」個人ではなく、「私を含む多くの学生」であることから、何らかの公的な共通問題が存在するのではないかと考えた（第 2 章）。

それを明らかにするために、私は私の友人を対象にインタビュー調査を行うことにした。内容は卒業論文の進行程度と、それに対する意識である。実際に調査してみると、11 月の時点で、ほとんどの学生が、卒論進行がはかどっていない、という状況であることが明らかになった。その理由として挙げられるものの中で多いものは「やる気がなかった」「面倒くさかった」という自身の内面の怠惰である。しかし多くの学生が卒論作成がはかどっていないことの理由が、単純な内面問題（私的問題）であるとは考えにくい。そこで私は卒論作成が遅れた理由として、自身の内面問題を挙げた学生の多くが、同時に周囲の環境の影響（「周りの友人もやっていなかったから自分もやらなくていいと思った」といったものである）も挙げている点に注目した。周囲の影響が、卒論作成に取り組む学生に影響を与え、学生の内面が変化したのではないか、と私は考えた。

それを明らかにするために、学生が卒論作成が遅れた理由を項目ごとに分類してみると、単純な物理的問題（「時間がなかった」等）より、先に挙げたような学生の内面を感化させ、結果として卒論進行が遅れる、という影響が多数であった。そしてその影響とは「本来やる気があった学生の内面を違う形に変化させる」のではなく「本来学生が持っていた卒業論文作成に対する消極的な気持ちを、より強く推進する」という形で働いている場合が大半を占めていた。以上のことから内面問題によって卒論進行が遅れたと考えている学生のほとんどは、その裏に周囲の影響による内面の変化が存在していたことがわかる。（第 3,4 章）

上記のことから学生の本来持っている卒業論文作成に対する消極性は、大学生活の中で育まれてきたものなのではないか、と私は推測した。しかしこの考えを元に、インタビュー対象学生に大学生活についてのインタビューを行ったところ、あまり両者に連関があるとは思えなかった。しかし大学生活のインタビューの中でも、多くの学生が周囲の影響によって、意識が変容・推進されることがわかった（第 5 章）。

今回のインタビュー結果から、学生は大学の授業、卒業論文作成に際し、周囲からの意識への影響を受け、本来持っているそれらへの消極性が増してしまうことが、主要な公的問題であることがわかった

1.序論――研究動機

私が本卒業論文のテーマを決定したのは、大学 4 年の 10 月のことである。私がこれほどまでに卒業論文着手に時間がかかってしまったのは、嫌なことは後回しにしてしまう、という私の怠惰な生活姿勢のためであると考えていた。もちろんそうした理由もあるだろう。私がもし計画的な性格で、4 年の春学期から卒業論文に取り掛かれていたなら、もっと余裕を持って秋学期を過ごせていたように思う。しかし怠惰な生活姿勢や、計画的でない卒業論文への取組み態度は、本当に「私」の問題なのだろうか。

4 年の秋学期になると、自然と卒論の話を友人とする機会が増える。「どのくらい進んだか」「ゼミなど周りの人たちは進んでいるか」などについて、複数の友人と会話を交わすが、答えはほぼ「あまり進んでいない」「周りも進んでいない」というような内容であった。中には私のように、10 月になってからテーマを確定・変更した人もいた。私は自分が、卒論作成が異常に遅れていると認識していたが、相対的に見てみると、あまり特異なものではないのではないか、と感じた。むしろ計画的で、順調に卒論を進めている友人のほうが数が少なく、特異であるように思えた。同時に、卒論作成を先延ばしにしてしまっていることは、「私」の個人的な問題ではないのではないか、と考えた。会う友人のほぼ全員が、「卒論はあまり進んでいない」と答えることには、何かしらの理由があると思われる。学生が卒論を円滑に進めることができないのは、「私」や「彼」「彼女」の問題だけでなく、「卒論が進んでいないと考える多くの人間」の問題でもあるのではないか。「特定の個人だけの問題」だけではなく、「一つの集団としての問題」が、卒論の進行程度に関係しているのではないかと考え、それを考察したいと思い、私はこのテーマを設定した。

また本テーマに付随するものとして、大学四年生の、これまでの「学生生活における授業態度」についても同時に調査を行った。多くの学生が、卒論作成進行が遅れていることと、大学に入学してからの授業に対する関心の変化には、何らかのつながりがあるのではないか、と考えたからである。

2.先行研究から

2.1 個人と社会の関係

C・ライト・ミルズは自著『社会学的想像力』の中で、歴史の中に生きる個人が「突然直面することになった巨大なさまざまの世界に、とても対処しきれないと感じるのに、不思議があるだろうか」（ミルズ 1965）と述べている。人間は社会の中で生きている動物であるため、社会との接点を持たずに生きていくことはできない。しかし、めざましいスピードで変遷する時代の中で、その変化に対応しつつ、自己の欲求を満たしたり、自己を安定

させたりすることは、簡単であるとは言い切れない、と考察している（ミルズ 1965）。また、世界の変化に対処しきれないと感じる人間が、自己を守るために「まったくの私的な人間にとどまろう」（ミルズ 1965）としてもおかしくはないとも言っている。しかし先に述べたように社会の中で人間が生きている限り、人間と社会との間には、確実に接点が存在する。その接点を省みず、自己の中だけで解決を図ろうとしても、うまくはいかないはずだとミルズは考えている。世の中の大きな変化に対応しきれず、私的な人間にとどまろうとする人たちにとって必要なものとは「情報を駆使し理性を発展させることによって、かれら自身の内部や世界に起こることがらを、明晰に総括できる精神の資質にほかならない」（ミルズ 1965）であると述べられている。個人に起こった諸問題とは、実は純粋な「個人」から発生した問題なのではなく、「個人」と「社会」との関係の歪みから生じているもので、それを解決するためには、個人と社会の関係に焦点を置かねばならない、とミルズは考えているのではないだろうか。

これを今回の私の研究内容に照らし合わせてみると、「個人」とは私を含む一人ひとりの学生、「社会」とは彼らを取り巻く周囲の世界である。後者は学生生活と言い換えてもいいかもしれない。私を含む学生は、大学生活の中で多くの変化にさらされてきた。高校とは違う授業形態、サークル・部活動、アルバイト、就職活動など、大学生活の中でさまざまな変化が個人の生活に現れていると思われる。その中に卒業論文もある。

先に私は卒業論文着手が遅れたのは、嫌なことは後回しにしてしまう怠惰な生活姿勢や、無計画的な自分の性格のためであると感じている、と書いた。しかし私は生まれたときから、ずっと怠惰な生活をしてきたわけではない。私は中学受験をしているのだが、その前後一年間は学校のテスト勉強もまじめにし、塾にもマメに通っていた。どちらかと言えば、計画的に学業に取り組んでいたと思われる。「私」という一個人だけを観察したならば、この時期に急に生真面目なほど勉強家になった点は、説明することのできない事象かもしれない。しかし「私」と私を取り巻く「社会」とを観察すれば、この事象に理由を見出すことができる。私は、親や塾の先生などからの影響を強く受けていた。親も塾の先生も私が勉強することに対して、とても前向きな態度を示したため、私はその期待に応えようと必死に勉強をしていたのではないか、という説明を与えることができる。このように個人だけ観察していては見えてこないものが、社会とのつながりを観察することで、浮き彫りになってくることもある。私が「勉強家」になったことに、（社会とのつながりによる）理由があったことと同様に、私が「怠惰」になったことにも、社会とのつながりによる影響があったのではないか。以下の章では「個人」から「個人」ではなく、「個人と社会の関係」から「個人」を考察していこうと思う。

2.2 集団と社会の関係の関係

しかし、序論で述べたように、いくら「私」と「私と社会の関係」を見ていても、「私の友人の多く」も卒論着手が遅れていることを説明することはできない。私が考察したいこ

とは、私を含む多くの学生と卒論に対する意識である。これを行うためにはどうすればよいか。

ミルズは「一個人の性格の内部で、また他人との直接的交渉の範囲の中で起こる」問題を私的問題（personal trouble)、「ある個人の限られた環境や、かれの内面生活の範囲を超えた事柄に関連している」問題を公的問題（social issue、直訳すれば社会問題）と定義している（ミルズ 1965)。

「卒業論文作成が私は遅れている」ならば、私個人に関する私的問題であるのかもしれないが、「卒業論文作成が多くの学生が遅れている」今回の事態は、公的問題の側に当てはまるものであると思われる。これだけ多くの学生が一つの事態に関して、似たような傾向を形成していることには、各々の個人的な事情があるのかもしれない。しかしそうした「無数の私的状況が（中略)、社会的歴史的な生活の巨大な構造をかたちづくっている」（ミルズ 1965）ようだ。

そしてミルズは、公的問題を解決するためには「いかなる人であれ一個人の生活機会のうちにその（公的問題の）解決の途を見出すことは望みえない」とし、「多くの個人的状況の変化を理解するためには、それを超えたところから考察しなければならない」と考えている（ミルズ 1965)。

「学生が卒論作成が遅れている」ことに関して、私の学生生活だけを考えてみても、それは問題を私的問題としてとらえた際の考察法であり、今回の問題には当てはまらない。今回はそれを越えたところ、つまり「卒論作成が遅れている」と感じている多くの学生と彼らの学生生活との関係に注目し、この公的問題を考察していきたいと思う。

3.インタビュー調査

3.1 調査方法

私は上記のことを考察するために、卒業論文作成を控えている友人にインタビューを行った。

卒論の進行状況や、大学での生活についての話を詳しく聞きたかったため、インタビューの形式を採ったが、一部質問紙による回答も行ってもらっている。これは調査対象者の意識をより明確にし、比較可能にするためのものであった。

また調査対象者は比較を行うために、私が所属するさまざまな集団（学部、ゼミ、所属サークル、交友のあるサークル、バイト先など）からサンプリングを行った。

また学生によっては二回以上のインタビューを行ったが、その際の回答は、一回目にインタビューを行った時点の各学生の気持ちを思い出して答えてもらっている。

3.2 質問とその回答結果 I

質問１:「インタビュー対象学生の卒論進行程度;は？」

私は友人に卒論の進行程度を、a 順調に進んでいる、b そこそこ進んでいる、c あまり順調には進んでいない、d まったく進んでいない、のいずれに当てはまるかを答えてもらった。結果は以下のとおりである。

表１　卒論進行程度についての回答

回答者	問１	回答者	問１
A さん	c.あまり順調には進んでいない	N さん	c.あまり順調には進んでいない
B さん	c.あまり順調には進んでいない	O さん	c.あまり順調には進んでいない
C さん	c.あまり順調には進んでいない	P さん	a.順調に進んでいる
D さん	c.あまり順調には進んでいない	Q さん	c.あまり順調には進んでいない
E さん	c.あまり順調には進んでいない	R さん	d.まったく進んでいない
F さん	c.あまり順調には進んでいない	S さん	c.あまり順調には進んでいない
G さん	c.あまり順調には進んでいない	T さん	b.そこそこ進んでいる
H さん	d.まったく進んでいない	U さん	a.順調に進んでいる
I さん	c.あまり順調には進んでいない	V さん	c.あまり順調には進んでいない
J さん	c.あまり順調には進んでいない	W さん	c.あまり順調には進んでいない
K さん	c.あまり順調には進んでいない	X さん	b.そこそこ進んでいる
L さん	a.順調に進んでいる	Y さん	c.あまり順調には進んでいない
M さん	d.まったく進んでいない		

結果

a 回答：3 人

b 回答：2 人
c 回答：17 人
d 回答：3 人

結果から、圧倒的に c 回答が多いことがわかる。インタビューを行った時期は、11 月の前半～中盤（それ以降にインタビューを行った学生には、11 月の前半～中盤の時期の進行具合を聞いている）で、どの学生も提出時期は 12 月か 1 月である。この時点で「まだ文献集めをしている段階」「本文はまったく書けていない」といった意見が多く、間違いなく学生の多くが、卒論作成が遅れていることを示している。

3.3 質問とその回答結果Ⅱ

質問 2：「なぜその進行程度になったと思いますか？」

以下はその回答である。なお複数回答があった場合は、回答した順に並べてある。

表 2　卒論進行程度回答の理由

L さん	a.順調に進んでいる	・「先生に十月末までに(一定量を)提出って言われたのを真に受けた」→提出しなかった人も多くいた。 ・「先生にやりなさいって促された」
P さん	a.順調に進んでいる	・「3 回の時点でもうテーマを決めていたため、取りかかりが早かった」 ・「ゼミで 3 回の夏に一定量書いてくるという課題があったため」
U さん	a.順調に進んでいる	・「運がよかった（インターンシップの経験を活かすことができた）」 ・「先生の促しが早かった（3 月秋には『テーマ決めて下さい』って言われてた） ・「自分の性格」「教職、公務員試験、就活などやることが多かったため、逆にどれもがんばれた」
T さん	b.そこそこ進んでいる	・「先生によく相談してた」「先生が上手く導いてくれた」
X さん	b.そこそこ進んでいる	・「ゼミが少人数ゼミで、周りのゼミの友達がやる気満々だった」
A さん	c.あまり順調には進んでいない	・「大学生活の中で楽観的になってしまった自分の問題」 ・「卒論ははじめての経験だからどうやっていいかわからず、やり始めにくかった」

B さん	c.あまり順調には進んでいない	・「4 回になって学業全般に対しての意識が下がった」「遊ぶことに興味が行ってしまった」 ・「就活でゼミに行けなかった」 ・「周りの影響もあったと思う。皆ゼミ来てなかったし」
C さん	c.あまり順調には進んでいない	・「やる気がなかったのが一番の原因」「面倒くさかった」 ・「皆（ゼミ友人）やってなかったから流された」
D さん	c.あまり順調には進んでいない	・「やる気がでなかった」「面倒くさいと思った」
E さん	c.あまり順調には進んでいない	・「レポートみたいな感じに捉えていて危機感がなかった」 ・「最悪取れなくても卒業できるし」
F さん	c.あまり順調には進んでいない	・「内容が（自分にとって）難しかった。そのためなかなか手が出なかった」 ・「自分の飽きっぽい性格だと思う。」
G さん	c.あまり順調には進んでいない	・「テーマが漠然としている」「いろいろな知識が必要」 ・「やる気がない」「昔から切羽詰らないとやらない性格だったなあ」 ・「ゼミの友人が怠けているのを見て自分もいいやって思った」 ・「ゼミの先生が優しかった」
I さん	c.あまり順調には進んでいない	・「やり方がまずかった→範囲を広げすぎた」 ・「本気でやっていなかった」「怠惰な自分に甘えてた」 ・「先生が合わない。あんまり聞きに行こうと思わなかった」
J さん	c.あまり順調には進んでいない	・「やる気が起こらなかった」 ・「内容が難しいし、いろいろなことを調べなきゃいけない」
K さん	c.あまり順調には進んでい	・「教授と合わない」「教授のアドバイスに自分が応えられない」「自分の頭が固い」

	ない	
Nさん	c.あまり順調には進んでいない	・「前のはテーマが範囲も広くなってしまってできそうになかったから、最近変えた」 ・「単純にやりたくなかった」「無気力だった」 ・「就職活動が終わりホッとしてしまった」 ・サークル・部活による拘束 ・周り（ゼミ友人）もやってなかったから
Oさん	c.あまり順調には進んでいない	・「自分のやり方の問題で遅れてしまっている」 ・「切羽詰らないとやらない自分の性格」 ・「ゼミ教授の『卒論やれ』っていう促しがよわかった」 ・「部活が忙しかった」→物理的にも、精神的にも影響があった ・「周り（ゼミ友人）もあんまりやってなかった」
Qさん	c.あまり順調には進んでいない	・「最後の学生生活を楽しもうと、遊びすぎた」 ・「彼女と夏に別れてしまって精神的にやる気になれなかった」 ・「分野に興味があるから、油断してた」 ・「周りの人（サークル・バイト）も進んでなかった」
Sさん	c.あまり順調には進んでいない	・「必修でないため、やる気が出ない」「やらなくても卒業できるから」 ・「先生もそこまで厳しくなく、強制してこない」
Vさん	c.あまり順調には進んでいない	・「先生が厳しい」「なかなか進行させてもらえない」 ・「バイトが忙しかった」 ・「やる気が出なかった」「間に合うだろうと楽観視していた」
Wさん	c.あまり順調には進んでいない	・「やる気がなかった」 ・「周り（ゼミ友人）もやってなく、教授も優しかったため、自分に甘えてしまった」 ・パソコンがあまり得意ではない
Yさん	c.あまり順調には進んでいない	・「危機感を持ってやることができなかった」 ・「もし周り（ゼミ友人）がもっとやっていたら自分もがんばれたかも」

H さん	d.まったく進んでいない	・「やる気がない」 ・「ゼミの皆も遅れてるから、自分もいいか、と思った」
M さん	d.まったく進んでいない	・「何とかなると楽観視している」 ・「就活が終わっていなくて、卒論の優先順位が下がっている」 ・周り（ゼミ・サークル友人）がやってなかったから
R さん	d.まったく進んでいない	・「やる気がない」「性格的にぎりぎりにならないとやらない」 ・「教授が優しく、強制力が弱いため」 ・「周り（ゼミ友人）もやってないからいいだろう、って思ってきた」

一見すると質問 1 で c、d 回答をしたほとんどの学生（20 人中 19 人）は「やる気がなかった」「面倒くさかった」「単純にやりたくなかった」等、卒論作成進行が遅れてしまった理由として、自身の内面の怠惰を挙げている。では、同志社大学は、元来無気力な学生ばかりが集まっていて、卒論作成進行が遅れてしまうのだろうか。

そう考えて表 2 を見てみると、「みんながやってなかったから流された（C さん）」「ゼミの友人が怠けているのを見て自分もいいや、と思った（H さん）」「ゼミ教授が厳しくなく、（卒論作成を）強制してこない（S さん）」等、周囲の影響を理由として挙げている学生も多いことに気付く。

4.調査結果考察①

4.1 項目別分類

この周囲の影響を「物理影響」と「意識影響」に分けて考えてみようと思う。前者は周囲の環境がそのまま卒論進行に影響を与え、本人の意思とは無関係にその進行具合に関わってくるもの（例：「就活でゼミにあまり行くことができず、人より着手が遅れてしまった」B さん）である。後者は周囲の環境が卒論に着手する学生の意識に影響を与え、その感化された意識が卒論の進行具合に関わってくるもの（例：「ゼミの先生が優しかった。あまり課題とか出されなかったから安心してしまい、着手が遅れてしまった」G さん）である。

両者の特性から、物理影響のほうは、周囲の環境がそのまま卒論進行具合に直結しているが、意識影響のほうは、周囲の環境が学生の意識を通してから卒論進行具合に関わっている。つまり意識影響は、卒論に着手する学生の内面を通過する過程を経ていることになり、周囲の環境が、卒論を進める学生の内面に関わっている場合がある、とは考えられないだろうか。

これを考察するために、表 2 を項目ごとに分類し、各学生がどの項目に当てはまるかチ

ェックを入れたものを以下に記す。併せて各学生が卒論が必修であるか否か、どの学部に所属しているかも記載する。

表 3　表 2 の項目別分類

回答者	質問1回答	学部	必修	①内面	¬②意識影響「大学生活」	¬③意識影響「ゼミ友人」	¬④意識影響「サークル友人」	¬⑤意識影響「バイト友人」	¬⑥意識影響「ゼミ教授」	¬⑦意識影響「その他の人」	¬⑧意識影響「就職活動」	¬⑨意識影響「部活・サークル」	¬⑩意識影響「難易度」	¬⑪意識影響「必修じゃない」	¬⑫物理影響「就職活動」	¬⑬物理影響「部活・サークル」	¬⑭物理影響「バイト」	¬⑮物理影響「インターンシップ」	¬⑯物理影響「ゼミ教授指導」	¬⑰物理影響「難易度」	⑱技術
L	a	社	○						○												
P	a	社	○						○												
U	a	政	○	○					○									○			
T	b	文	○																○		
X	b	政	○			○															
A	c	社	○	○	○								○								
B	c	社	○	○		○									○						
C	c	文	○	○		○															
D	c	文	○	○																	
E	c	法		○										○							
F	c	文	○	○									○								
G	c	政	○	○		○			○											○	
I	c	文	○	○					○												○
J	c	政	○	○									○								
K	c	社	○																○		○
N	c	社	○	○							○					○				○	
O	c	社	○	○		○			○			○				○					○
Q	c	文	○	○			○	○		○											
S	c	法		○					○					○							
V	c	社	○	○								○					○		○		
W	c	文	○	○		○			○												○
Y	c	社	○	○		○															
H	d	法		○		○															
M	d	社	○	○		○	○				○										
R	d	政	○	○		○			○												

※表 3 の補足

・項目「意識影響：大学生活」…A さんのみ回答したものである。A さんは「大学生活の中で、何事に対しても楽観的になってしまった。入学当初はまじめに授業にも出ていたが、高校とは違い、それが強制ではなかった。周りのみんな（大学生たち）も授業をサボっていた。だから（自分も）怠けるようになった。それでも単位が取れてきたから、『何とかなるんだ』と思うようになってしまった。卒論にもその気持ちを引きずったままだった」「高校のときの自分だったら、もっと計画的に卒論に取り組んでいたと思う」と語ってくれた。大学生活を続けていく中で、周囲の影響が徐々に本人の意識に浸透し、自己の内面が変化したようだ。

・　項目「意識影響：部活・サークル友人」と「意識影響：部活・サークル」の違い
…前者は「部活・サークルの友人の卒論に対する意識が、インタビュー対象学生の卒論に対する意識に影響を与えた」もの（「サークルの友人が卒論何もやってなかったから、自分もやらなかった」Q さん）。後者は「部活・サークルに対するインタビュー対象学生の意識の強弱によって、卒論に対する意識が相対的に変化した」というもの（「4 年になっても部活が忙しくて、卒論よりも部活のほうに意識が行っていた」O さん）。

・項目「難易度」…「卒論テーマが自分にとって難しい」「調べていく内容が（自分にとって）難解」など、卒論という課題の難易度が高いために、それが進行具合に影響があった場合、この項目に当てはまる。「難易度（物理）」は「自分のテーマにはいろいろな知識が必要。それをいちいち調べていくのが（実際に）時間がかかる（G さん）」というタイプのもの。「難易度（意識）」は「内容（テーマ）が自分にとって難しいものだった。だからやるのに躊躇してしまい、始めるのが遅れてしまった（F さん）」というタイプのもの。

・項目「必修じゃない」…「卒論が必修単位に含まれていないため、他の単位で埋め合わせることができる」というものは、この項目に含まれる。

・項目「技術」…「自分のやり方、実力が卒論作成進行に関わった」というものは、この項目に含まれる。またこれは物理的なものではあるが、自身のスキルの問題なので、周囲の影響には含まれないものとする。

4.2 分類から I ――少ない物理問題

全体では、物理影響項目へのチェック数は 10、意識影響へのチェック数は 33 であった。質問 1 で c、d 回答をした学生で絞ってみると、物理影響項目へのチェック数は 8、意識影響へのチェック数は 29 であった。また質問 1 で a、b 回答をした学生で絞ってみると、物理影響項目へのチェック数は 1、意識影響へのチェック数は 4 であった。このことから、卒論の進行が順調であるかないかに関わらず、物理影響を原因に感じている学生は少ないということがわかる。多くの学生の卒論進行には物理影響ではなく、意識影響が深く関与しているのである。

また卒論が順調に進んでいない理由として、他のことに時間をとられていた、という時間的拘束を挙げる学生は 4 人しかいなかった。その中でも就職活動による時間的拘束を挙げたのは B さんただ 1 人だけであった。意識影響として就職活動を挙げているのも 2 人だけと、就職活動は学生の卒論進行程度にはあまり影響がないものなのかもしれない。「就活は忙しかったけど、春学期中には終わってた。（卒論作成が遅れたことに）特に影響はなかったと思う。だって（卒論）進めようと思えば夏にできたもん」と G さんは語ってくれた。

4.3 分類からⅡ――「内面問題」と「意識影響」の関係

質問 1 で c、d 回答をした学生のうち、周囲の影響をその理由として挙げている学生は 20 人中 19 人であった。つまり内面の問題と同程度に、周囲の影響は学生の卒論進行に関わっているということだ。

これをもう少し細かく分類して見てみると、周囲の「物理影響」のみを挙げた学生は 1 人、周囲の「意識影響」のみを挙げた学生は 12 人、どちらの影響も挙げた学生は 6 人いた。この結果から 19 人中 18 人は、卒論進行が遅れていく中で、何らかの意識影響を受けているということがわかる。そしてただ 1 人、物理影響のみを挙げた K さんは、卒論進行が遅れた理由として内面の問題を、同じくただ 1 人挙げなかった学生である。このことから、卒論進行が遅れる大きな要因である「内面問題」と「周囲の意識影響」には、深いつながりがあるのではないかと推測される。

卒論進行が遅れたことを説明する際に、内面の問題を挙げた学生 19 人の中で、意識影響を同時に挙げている学生は 18 人いる。この 18 人は全員が総じて極度の怠け者であるのではなく、怠けに向かっているベクトル（自身の内面）が、周囲の意識影響によって、その程度が強まってしまったのではないだろうか。あるいは、もともとは計画的に卒論を進行させていこう、と思っていた学生も、周囲の意識影響によって、「怠け者」になってしまった可能性もある。18 人全員が極度の怠け者であったと考えるよりも、こちらのほうが妥当であると思われる。

4.4 分類からⅢ――「対人」と「それ以外」の意識影響

意識影響の中でも、さらに「対人」の影響と「それ以外」の影響に分類することができる。「意識影響―対人」は「周りの友人も自分と同じで、ぜんぜん進んでないと思ったから、自分もまだまだ大丈夫と思っていた（M さん）」という周囲の人の影響によって、学生の内面が感化されたタイプ。「意識影響―それ以外」は「バイトが忙しかった。だから時間的（物理影響）にも精神的にも卒論が進められなかった（V さん）」というように、周囲に卒論以外に意識の多くのウェイトを占める要因があり、相対的に卒論への意識が弱まってしまうタイプのもの。こちらのタイプは「意識影響―対人」と違い、他者の存在は関与しないものである。

「意識影響―対人」は項目 2～6、「意識影響―それ以外」は項目 7～10 であるとする。項目 1 は大学生活全体を指していて、その中には「意識影響―対人」と「意識影響―それ以外」が混合されていると考えられるため、これはどちらにも含まないものとする。

卒論進行が遅れていると感じている学生に絞った場合の「意識影響―対人」へのチェック数は 19、「意識影響―それ以外」へのチェック数は 9 だった。また「意識影響―対人」のみにチェックがある学生は 10 人、「意識影響―それ以外」のみにチェックがある学生は 5 人、「意識影響―対人」と「意識影響―それ以外」どちらにもチェックがある学生は 3 人で

あった。上記のことから、他者が関わらない影響よりも、他者と関係する対人影響のほうを、卒論が順調に進められなかった理由として、多くの学生に挙げられていることがわかる。またインタビュー対象の学生全員が経験している就職活動（または公務員試験）や、25 人中 18 人が何らかの部活・サークルに所属しながら、それらが意識の大部分を占め、卒論作成に影響を与えたと答えた学生は 4 人しかいない。このことからも就職活動、部・サークル活動を含む「意識影響―それ以外」を、卒論が遅れた理由として挙げた学生がいかに少ないかわかる。

4.5 分類からⅣ――最も強い「意識影響―対人」とは？

「意識影響―対人」を各項目ごとに細かく見ていくと、卒論進行が遅れた人の中で、ゼミ友人影響は 9、ゼミ教授影響は 6、それ以外の友人の影響は 4 のチェック数である。やはり卒論作成に直接関係のあるゼミ内での対人影響が学生にとって、強いものであることがわかる。

以下ではさらに細かい考察を行うために、チェックを入れた 11 人の学生一人ひとりを、「意識影響―対人」の観点から、見ていこうと思う。

①B さん
・ゼミ友人の影響
・「就活でしばらくゼミに行っていなくて、久しぶりに行ってみたら、自分以外のゼミの人もあまり出席していないようだった。その影響が（卒論進行が遅れた理由として）あったと思う。みんなもゼミ来てないんだし、自分もいいか、と思った」

②C さん
・ゼミ友人の影響
・「自分は四年の四月の時点では、卒論早めに終わらせようと思ってたけど、何もやっていないゼミのみんなに流されてずるずると遅れてしまった」

③G さん
・ゼミ友人の影響＋ゼミ教授の影響
・「ゼミの友達が怠けているのを見て、自分もいいやと思った。それにゼミの先生が優しいから、卒論を落とさないって言ってくれている」

④H さん
・ゼミ友人の影響
・「自分も遅れているけど、ゼミのみんなも遅れているから、いいか、って思った」

⑤I さん
・ゼミ教授の影響
・「先生と自分の進め方が合わなかった。もともと仲もよくなかったから、積極的に質問しに行こうと思えなかったことが遅れた原因だと思う」

⑥M さん
・ゼミ友人の影響
・「自分はちゃんとやろうと思っていたが、ゼミやサークルの友達が何もやっていなかったので、遅れてしまった」

⑦O さん
・ゼミ友人の影響＋ゼミ教授の影響
・「ゼミ教授が『卒論やれ』っていう促しが弱く、あまり強制してこなかった。それに加えて周りのゼミのみんなもあまりやっていなかったことが遅れた原因だと思う」

⑧R さん
・ゼミ友人の影響＋ゼミ教授の影響
・「教授が優しく、強制してこなかったことと、周りのゼミの友達がやっていないから、自分もいいかな、と思った」

⑨S さん
・ゼミ教授の影響
・「卒論が必修でないため、先生もそこまで厳しく強制して学生にやらせない」

⑩W さん
・ゼミ友人の影響＋ゼミ教授の影響
・「周りの友達もやってなくて、先生も優しかったからそれに甘えてしまっていた感じ」

⑪Y さん
・ゼミ友人の影響
・「周りもやっていないから自分もやらなくていいや、ってほどではないけど、周りが進んでいたら、自分ももう少し焦れたかなっていうのはある」

上記のように、ゼミ友人の影響のみを挙げた人は 5 人（B,C,H,M,Y）、ゼミ教授の影響のみを挙げた人は 2 人（I,S）ゼミ友人・ゼミ教授両方の影響を挙げた人は 4 人（G,O,R,W）であった。具体的な話はどの学生もほぼ共通しており、ゼミ友人の影響は「周りもやって

いなかった」というもの、ゼミ教授の影響はＩさんを除き、「卒論作成の促しが弱かった」というものである。

注目すべき点は、同じ「周りもやっていなかったから自分も遅れてしまった」という影響理由でも、それを受け取る学生の側の心境に違いがある点である。たとえば O さんは、「部活が忙しい」という意識影響が根底にあり、もともと卒論に対しては消極的な感情を持って接していた。対して C さんは「卒論早めに終わらせよう」と考えていたにも関わらず、卒論に取り組んでいないゼミの友人の考えに感化され、実際に自らの進行も遅れてしまった。前者は、消極的な自身の気持ちに、周囲の影響の相乗効果で、さらに卒論への消極性に拍車がかかったものである。後者は、積極的であったはずの自身の気持ちに、周囲の影響があったことにより、考えが変わり、卒論への気持ちが消極的なものになってしまったものである。前者を「消極＋消極影響タイプ」、後者を「積極→消極影響タイプ」とし、二回目以降のインタビューで、対象学生にどちらに当てはまるかを確認してみた。その結果は以下のものである。

・「消極＋消極影響タイプ」…B,G,H,O,R,W,Y　7 人
・「積極→消極影響タイプ」…C,I,M,S,　4 人

ゼミ友人・ゼミ教授両方の影響があった、と考えている学生は「積極→消極影響タイプ」には一人もいない。「積極→消極影響」のほうが、考えが変わるほど周囲の対人影響が強かったのではないか、と思われたが、単純にそういうわけではないようだ。またゼミ友人・ゼミ教授両方の影響があった、と挙げたからといって、どちらか一方を挙げた学生以上に、彼らが周囲の影響を受けている、とも言えない。どの程度の影響に対して、どれだけの反応を示すかは個人差があるものなのかもしれない。

人数を比較してみると、「消極＋消極影響タイプ」のほうが多いことがわかる。これを意識影響を受けた、と考えている学生 18 人全員に対して行ってみると、以下のような結果になった。

・「消極＋消極影響タイプ」…A,B,E,F,G,H,J,N,O,Q,R,W,Y　13 人
・「積極→消極影響タイプ」…C,I,M,S　4 人
・分類?…V　1 人

※分類？について…V さんは「サークルの幹部をしていて、そちらに意識を取られた」という意識影響を挙げているが、それはあまり強い影響ではないらしく、卒論が遅れているのは、「教授が厳しく、なかなか進行させてもらえない」という物理影響が主な理由であると考えている。そのため「自分がどっち（に含まれるの）かわからない」と答えたので、今回はどちらにも分類しないことにする。

意識影響を受けたと考える学生全体で見ると、より人数の差がはっきりと表れる。また「積極→消極影響タイプ」の学生が増えていないことから、「やる気はあったが、周囲の影響で考えが変わり、やる気がなくなった」のは、ゼミ内で影響を受けた学生だけということになる。ただ先にも述べた通り、個人差があるため、ここから「ゼミ内の影響は、学生の考え方を変えるほどの影響力がある」とは言い切れない。「意識影響―それ以外」やゼミ友人・教授以外の「意識影響―対人」を挙げた人たちの中に、もともと積極的に卒論に取り組もうと考えていた学生がいなかっただけのことである。ここから言えることは、「意識影響は『もともと卒論に対して、消極的な感情を持っている学生』に対して働く、という役割が主である」ということだ。

4.6 考察まとめ

卒論進行が遅れる理由として、周囲の人や環境が、学生の意識に影響を与えている場合がほとんどである。その影響の与え方とは、もともと学生が持っている卒論に対しての消極性を、より強く推進する、という形で働いている場合が多い。これが多くの学生が卒論作成進行が遅れてしまうという公的問題の、大きな要因の一つであると考えられる。その中でも特に、直接的に卒論進行に関わる、ゼミ友人・教授からの影響が、多くの学生の卒論への消極性を強めている要因であると推測できる。

5 章　調査結果考察②

5.1 消極的な意識を形成する要因「卒論は書けば OK？」

前章で、周囲の影響によって、学生の卒論に対する消極性がさらに推進されている可能性が大きいことがわかった。元来はそれほど大きくなかった消極性が、周囲の影響との相乗効果で、次第に強まって行き、11 月の段階になっても「あまり順調には進んでいない」という結果を導いているのではないだろうか。

これに加えて以下では、私がインタビューを行っていて気になった点、すなわち「学生は『卒論は書けば（内容はどうであれ）合格する』と考えているか」について、考察していこうと思う。これは数人の学生が、自身の内面問題として語ってくれた「危機感がなかった」「何とかなると楽観視している」という言から、私が「消極的内面」の醸成に関わりがあると推測する一つの要因である。

質問 3 :「あなたは『卒論は書けば（規定の字数を満たし、形式が整っていれば、内容はどうであれ）合格する』と思っていますか？」

この質問に対し a 思っている、b やや思っている、c あまり思っていない、d まったく思

っていない、のいずれに当てはまるかを答えてもらった。また、そう思う理由も同時に答えてもらった。結果を以下に記す。

表 4　「卒論は書けば合格するか？」に対する回答と理由

回答者	回答	理由
E さん	a.思っている	・一応ちゃんと書いて仕上げる予定なので ・先生が優しいので ・卒論で落とされたという話を聞かないので
G さん	a.思っている	・先生が期待していない。書けば OK と言っている ・学部生レベルにちゃんとしたのは難しいと思ってる
J さん	a.思っている	・先生が優しいから ・形式が細かく指定されているから
N さん	a.思っている	・教授が規定数通り書いてあれば通すと言っていたから ・出して落ちた人を知らないから
P さん	a.思っている	・提出から逆算して計画的にやってきたので ・先生との話し合いを重ねているので
Q さん	a.思っている	・得意分野をテーマとしているので自信がある ・先輩から「落ちた人いない」という話を聞いている
R さん	a.思っている	・先生が大変優しいから→先生も落としたくないだろう ・今までのレポートも何とかなってきたから
S さん	a.思っている	・ゼミがゆるい ・学部が卒論必修でない→そんなに厳密に審査しないだろう
W さん	a.思っている	・卒業した人や友人の情報から、そこまで厳しくはないだろうと予測 ・（大学側が）規定通りにできていれば、一大学生にそこまでのレベルは求めていないだろう ・先生の温情を期待しているから
A さん	b.やや思っている	・卒論で卒業できなかった人がいるのを聞いたことがないから。

C さん	b.やや思っている	・大学側ができるだけ卒業させようとしてくれる気がするから。 ・卒論をやった人はほとんど卒業できているから。
D さん	b.やや思っている	・大学側も卒業させたいと思ってそう。 ・頑張って書いてるし。
I さん	b.やや思っている	・論証の形になっていれば OK だと思うから ・先生もそれほど期待していないと思うから
K さん	b.やや思っている	・まともに書いて落ちた人を見たことがない
L さん	b.やや思っている	・卒論を落とした前例を聞かない ・「卒業してほしい」と先生も思ってくれているはずだから
M さん	b.やや思っている	・卒論で留年したという人はほとんど見かけない ・周囲と比べて相対的に論文を書きなれているため
O さん	b.やや思っている	・自分も真剣に取り組んでいるから ・教授と話し合っているから ・他の学生の論文の水準を知っているから ・卒業＝就職に直結するから
T さん	b.やや思っている	.・教授が書けば OK と言っているから ・落ちたという話を聞いたことがないから
X さん	b.やや思っている	・先生と仲が良いため ・就職が内定しているため
Y さん	b.やや思っている	・かなりできていなかった先輩でも合格していたから ・追い込まれたらやるタイプだから
F さん	c.あまり思っていない	・「内容が伴わないと…」と（教授に）実際に言われたから ・だが最後の最後には温情で何とかしてくれるだろう
U さん	c.あまり思っていない	.・大学の授業と同じで「レポート」だと思っているから

V さん	c.あまり思っていない	・教授が厳しい。去年教授が就職の決まっている院生を落としたことを聞いてさらに…。
B さん	d.まったく思っていない	・大学生としてのレベルが求められるはずだから。 ・書くだけでいいなら長い期間をかける必要はなく、ただのレポートでいいと思うか ら ・卒論落とされたという話を聞いたことがある（一回目のインタビュー）。
H さん	d.まったく思っていない	適当（いいかげん）に終わらせて出すなら皆やる。周りに差をつけないと落ちる

結果
a 回答：9 人
b 回答：11 人
c 回答：3 人
d 回答：2 人

結果から「卒論は書けば合格する」と考えている学生が大半を占めていることがわかる。その理由として特に多かった回答は「周り（ゼミ・サークル等の先輩、または大学生活を通して）で『卒論を落とした』という話を聞いたことがない」と「大学・ゼミ教授が心情的に、卒論を落とすことはない」というものである。前者は 12 人、後者は 13 人の学生が、「書けば合格する」と考える理由として挙げている。興味深い点は、どちらも周囲の人間が登場している点である。前者は、自分以外の学生を比較対象として持ち出し、彼らが「卒論を落としていない」ことから、自身もそうであると考えている。後者は、「就職先が内定しているような学生に対して、いきなり卒論を落とすということはないだろう（X さん）」というように、大学・ゼミ教授の心情を予測したものである。

これらは前章の分類の観点から見れば、「意識影響」に含まれるものだと考えられる。つまり「書けば合格する」と考える大半の学生も、その根拠は周囲の影響によって作られているのである。「危機感がなかった」「何とかなると楽観視している」ことの遠因として、意識影響を受けた「書けば合格する」という内面が関わっていると考えられないだろうか。

この意識影響（特に前者のもの）が、前章で挙げた意識影響と異なる点は、影響を受けた期間が、学生が卒論に取り掛かる以前からのものである点だ。卒論着手が始まる以前から「卒論をやった人はほとんど卒業している、という話を先輩から聞いている」「それを聞

いたのは自分がゼミを決めた三年の時点でのこと」と C さんは言っている。このことから、卒論に実際に取り組み始める以前から、周囲の意識影響によって、すでに学生の内面は感化されている可能性がある、ということがわかる。

また「卒論は書けば合格する」と思っていないからといって、危機意識を持ち、卒論作成進行が早くなる、というわけではないようだ(質問 3 で c,d 回答をした 5 人の学生のうち、質問 1 で a,b 回答をしたのは U さんのみ)。危機意識を（質問 3 で a,b 回答をした学生に比べ）持っているとしても、その他の意識影響や物理影響も同時に存在しているので、それらによって U さん以外の 4 人は実際に進行が遅れてしまっている。

5.2 卒論着手以前の意識影響について

ここで注目してみたいのは、質問 1 回答の理由として A さんが挙げた「大学生活の中で（自分の内面が）楽観的になってしまった」というコメントである。A さんは「入学当初はまじめに授業にも出ていたが」、大学生活の中で周囲の学生を見ていくうちに「(自分も）怠けるようになった。それでも単位が取れてきたから、『何とかなるんだ』と思うようになってしまった。卒論にもその気持ちを引きずったままだった」ことが、卒論進行が遅れた原因であると回答している。A さん以外、このように長期間に渡る周囲の影響を、卒論進行程度に結びつける学生はいなかったが、それは本人が自覚しないところで、徐々に意識に浸透していったものだからかもしれない。それを「自己の内面の問題」と捉え、「危機感がなかった」「何とかなると楽観視している」という回答に至ったのではないだろうか。

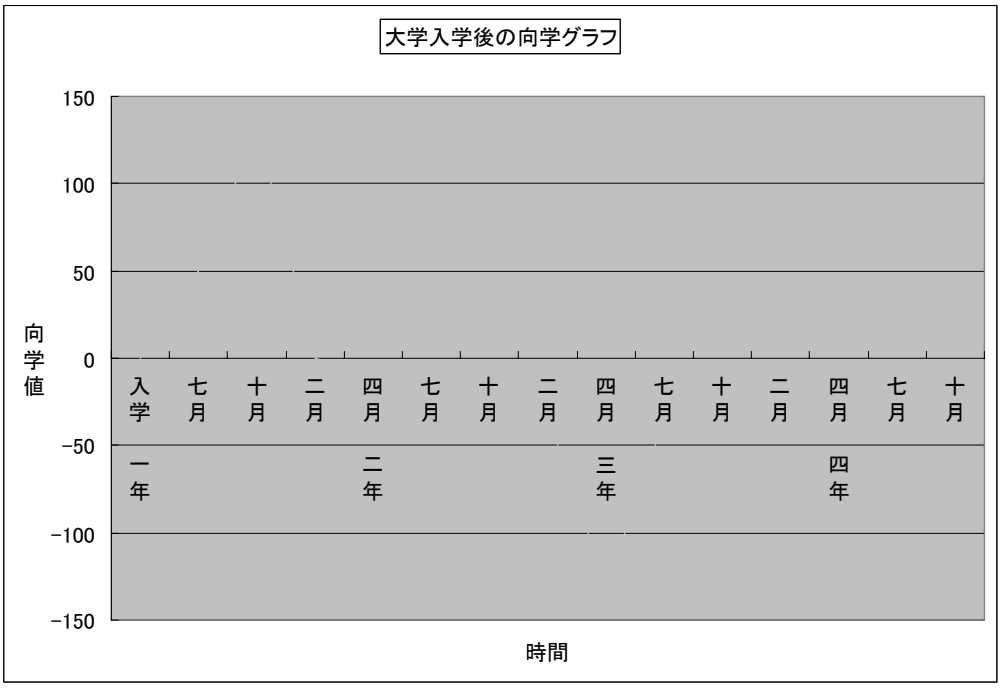
ミルズは、世界の変化に対処しきれないと感じる人間が「まったくの私的な人間にとどまろう」としてもおかしくないと述べている（ミルズ 1965)。これは、自身に起きている諸問題を、社会とのつながりは考慮せず、私的問題として処理してしまいがちである、ということなのではないだろうか。事実、質問 1 の理由として、多くの学生が、自身の内面の問題を真っ先に挙げている。意識影響の項目にチェックが入った 18 人中、内面の問題を周囲の意識影響と併せて答えるか、周囲の意識影響を答えてから内面の問題を答えた学生は、表 2 から A さんを含め 4 人だけであることがわかる。残りの 14 人は、「やる気がなかった」「面倒くさかった」等の内面問題を答えた後に、周囲の人や環境について語っている。

このことからも、周囲の意識影響は、自身の内面ほど当人に感知されていないことがわかる。卒論着手が始まるまでに、卒論進行に関わる意識影響があったとしても、それに対して学生が無意識であった可能性は低くはないのではないだろうか。

5.3 学生生活の中での意識影響「向学グラフ」

以下では学生生活の中で、間接的に卒論に関わっていると思われる「大学の授業に対する学生の意識」について考察していき、その中に学生の内面に影響を与えるような意識影響がなかったかを探ってみたいと思う。

まずインタビュー対象学生に、以下の「大学入学後の向学グラフ」への記入を行ってもらった。また各学生の記入基準にばらつきが出ないように、「グラフ記入についての説明と注意点」を、どの学生にも理解してもらい、記入を行ってもらった。



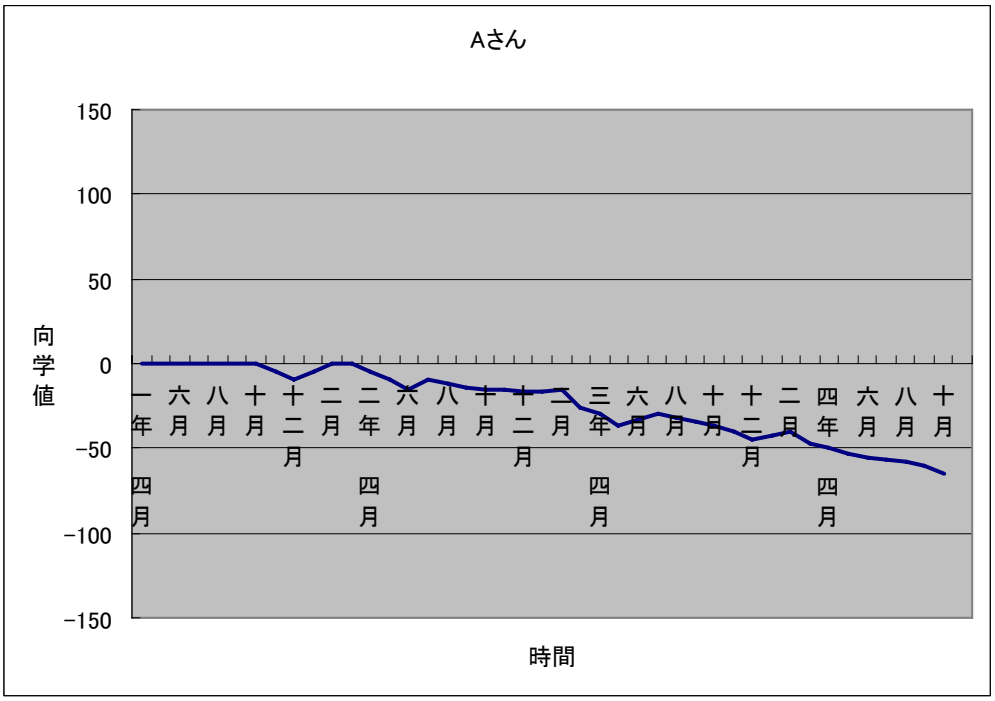
「グラフについての説明と注意点」

- X 軸は大学に入学してからの時間の経過を表し、Y 軸は講義への積極性を「向学値」として表している。
- 「四・十月」は春・秋学期の開始「七・二月」は春・秋学期テスト期間であることを表す。
- 上記の時期は目安であり、その時期に点を取らなければいけないわけではない。それ以外の時期にも、グラフが変動するような要因があったと考えるなら、その時点で点を取り、グラフを描くものとする。
- 「向学値」は、どの学生も入学時を±0 とし、そこからの相対でグラフを作ってもらった。
- 「向学値」は厳密には「勉強に対する関心」のことではなく、「講義へまじめに出席しよう」という気持ちのことであるとする。例えば「勉強は嫌だけど、単位のために授業には出席しなければいけない」という気持ちが強いなら、向学値は相対的に高いものとする。もちろん「単純に自分の興味ある授業内容であったため、積極的に授業に参加していた」場合は、向学値は相対的に高いものである。
- 「向学値」は意識のことである。例えば「部活の試合があって授業にはぜんぜん出てい

なかったが、授業に出なければいけない、という気持ちは強かった」という場合は、向学値は相対的に高いものとする。逆に「実際に授業には出席していたが、まじめに講義を聞くつもりはなく、寝てばかりいる形だけの出席であった」という、講義に対して「怠け」の気持ちが強かった場合は、向学値は相対的に低いものとする。

- 「部活の試合前で、そちらのほうに意識が集中してしまい、相対的に授業への積極性は低くなった」という場合は、意識問題なので、向学値は相対的に低いものとする。
- 上記のように部活試合やサークル活動、定期テストや友人の影響はそのままグラフに表すものとする。例えば「テスト前なので、それまでに比べて授業にはまじめに出席しなければいけないと思った」という場合は、向学値は相対的に高いものとする。

以上のことを踏まえた上で、各学生に記入を行ってもらった。記入後、グラフの変動があった点についてインタビューを行い、向学値の変動要因を探っていった。以下に各学生のグラフと、変動要因をまとめたものを記す。

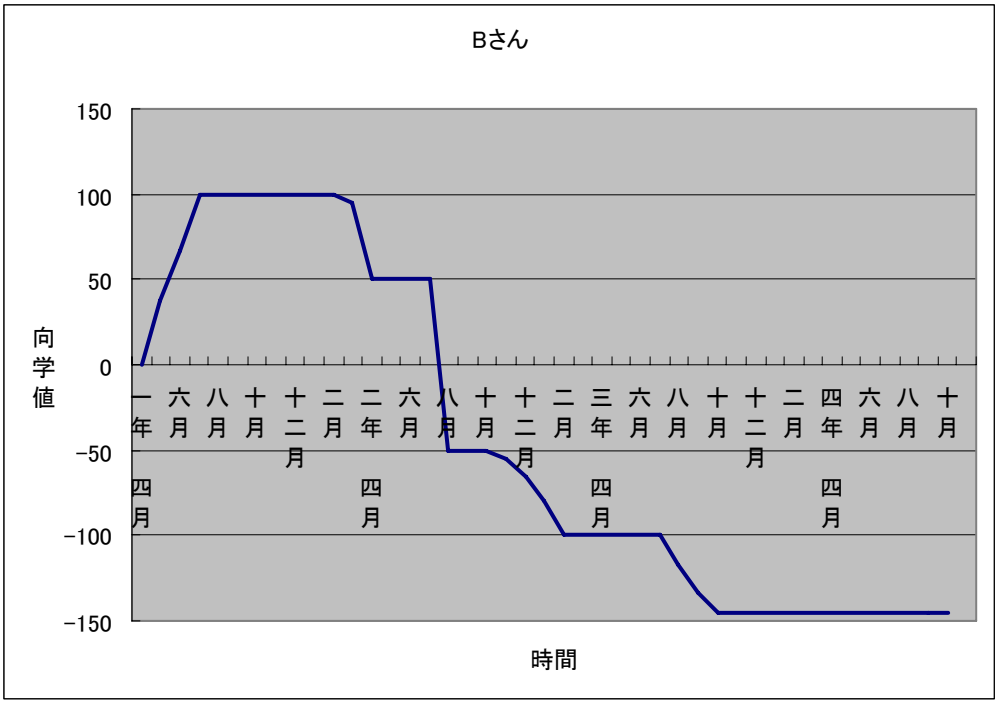


グラフ 1「個人向学グラフ A さん」

・入学～一年十月まで :「大学に慣れていなくて、どの程度やればいいかわからなかった」。この時期は周りがサボっていても、上記の理由から自分も流されてやる気がなくなることはなかったようだ。

・一年十月以降 :「大学に慣れてきて、『このくらい勉強すればいいんだ』っていうのがわかって、授業に行く気がどんどんなくなる」。「周りを見てもサボる人が増えてきたし、自分も怠けても大丈夫と思った」→もともと自分の中に授業に対して高い積極性があったわけではなく、「自分やる気ない＋周りもやる気ない」の相乗効果でこの時期を境にどんどん下降線に。

・グラフが強いマイナスとなっても「どんどん授業に行くのが億劫になっていったけど、何とか行ってた」というようにあまりサボりはしていない。そのため、テスト期に大きくプラスになることもない。「通常時もテスト直前もそんなに授業への積極性は変わらない」。



グラフ 2「個人向学グラフ B さん」

・入学後の一年間：「どんくらい勉強すればテスト通るのかわからないし、とりあえず勉強しておこう」

・二年四月～七月まで：「勉強がんばらなくても、慎重に授業選びをすれば単位取れる」。この頃からサボれる授業はサボるようになる。

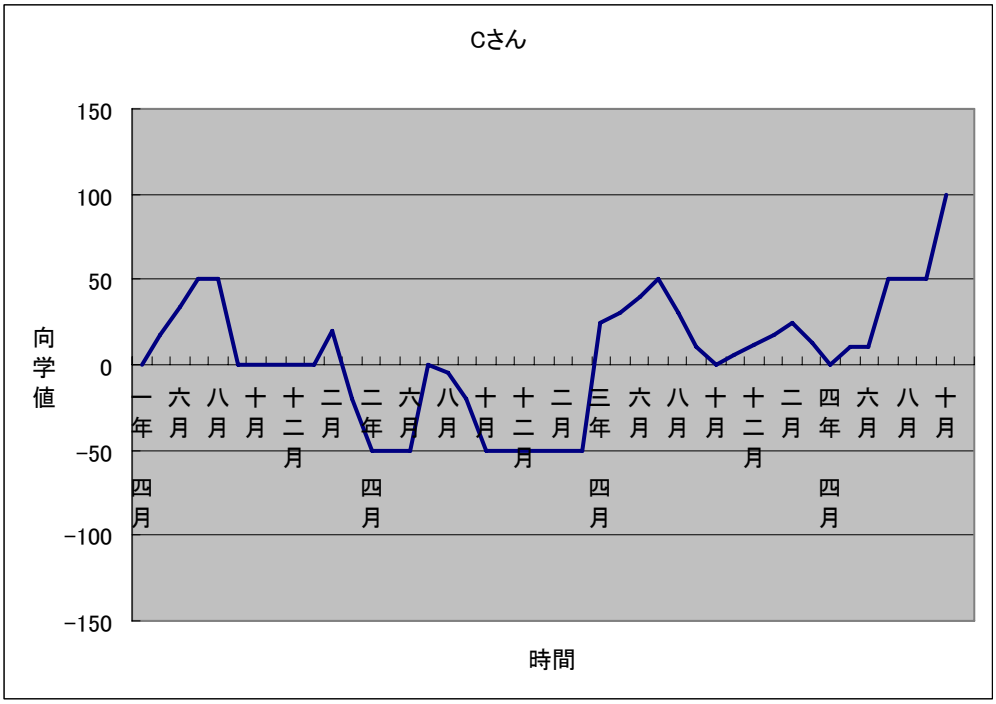
・二年七月～二年二月まで：「単位も取れてきて、やる気もなくなってきた」。履修単位が減ることによって、やる気が減退。「もう適当（いい加減）にやっても大丈夫だろう」。

・二年三月～三年七月まで：「引越しして、遊ぶことが多くなった。卒業単位まであとちょっとだし」。

・三年七月～十月：「残り単位がすごい少なくなってきて」「余裕が出た」ため、授業にはぜんぜん出席しなくなる。

・卒論作成と違い、授業に対する積極性に関しては周囲の影響は「なかったと思う」。自分で判断してると思っている。

・しかし三年七月以降の授業に対する積極性の減退が、卒論作成に影響しているとは思っている。



グラフ 3「個人向学グラフ C さん」

・入学～一年七月まで：「大学での勉強がどれくらいやればいいかわからず、がんばっちゃった」

・一年七月～一月まで：「こんなんでいいんだと思った」。予想以上に簡単に単位が取れそうなので、以前ほどの積極性はなくなったようだ。でも授業には出席していた。

・一年二月：テスト期も「春学期ほど力をいれなかった」。

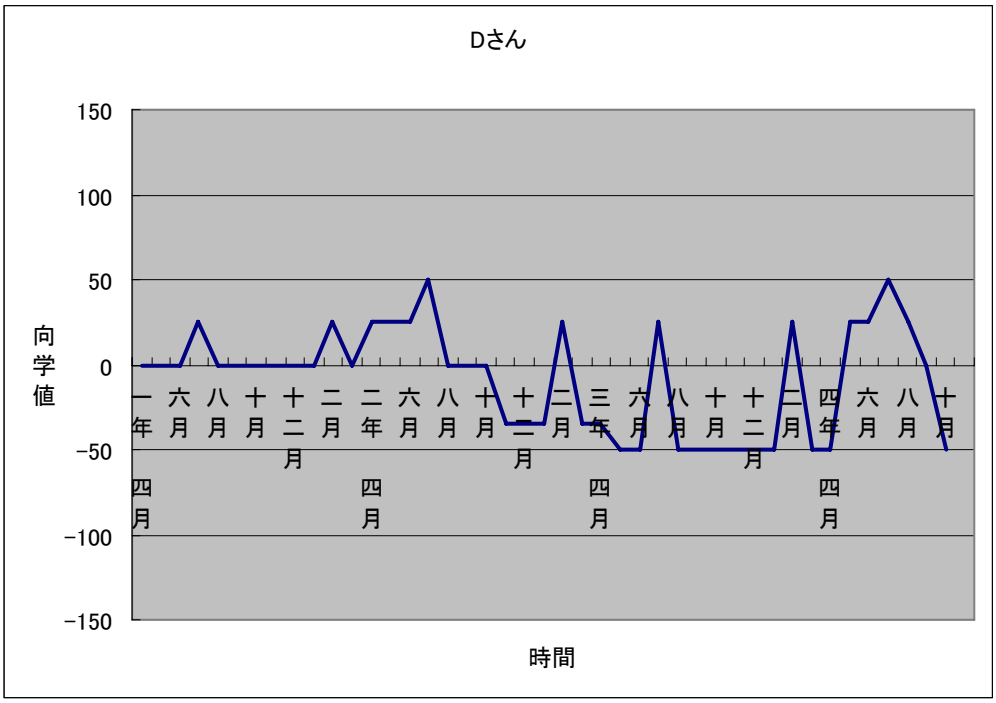
・二年：「友人がサボり出したので、自分もいいかって思った」。もともと自分は授業でなきゃって思っていた→「同調指向」タイプ。「春学期はテストだけ何とかがんばれたけど、秋はテストもがんばれなかった」。学校に行かなくなってしまったことで、人との交流が減り、精神的に鬱屈してしまったようだ。

・三年：「ゼミが始まって学校に行かなきゃだった」「行ってみたら心の病みは回復した」「ゼミが楽しかった」。二年の時の反動で、春学期は一年の春学期くらい出席し、「授業が難しかった」こともあり、「テストもがんばった」と言う。

・四年：「ゼミが引き続き楽しかった」「卒論は嫌だけど、ゼミ行くっていう気持ちが強かった」

・周囲からの影響は二年の「友人がサボり出したので、自分もいいかって思った」部分と、四年のゼミが理由により、再び大学に行きだした部分である。

・意識としてゼミという集団が大きなウェイトを占めているため、そこからの影響を強く受け（「周りがやってないから自分も間に合うと思った」同調指向タイプ）、卒論着手が遅れた？



グラフ 4「個人向学グラフ D さん」

・入学からの一年：「入学時から変わらず授業には出て、テスト時期は普段よりまじめだった」。「周りでサボっている人もいたけど、それにつられて自分もサボろうとは思わなかった」。

・二年四月～七月：「専門教科が始まって、授業が面白くなった」。勉強への関心が高まり、授業への積極性が増した。

・二年七月～三月まで：「だんだん飽きてきて、授業に行くのが面倒になった」「周りもサボってるし、いいかって思った」。順序として「授業飽きてきた・面倒くさい」→「周りがサボっている」であるため、「自分のやる気のなさと、周囲の影響の相乗効果で授業への積極性が減退した」安楽指向タイプである。

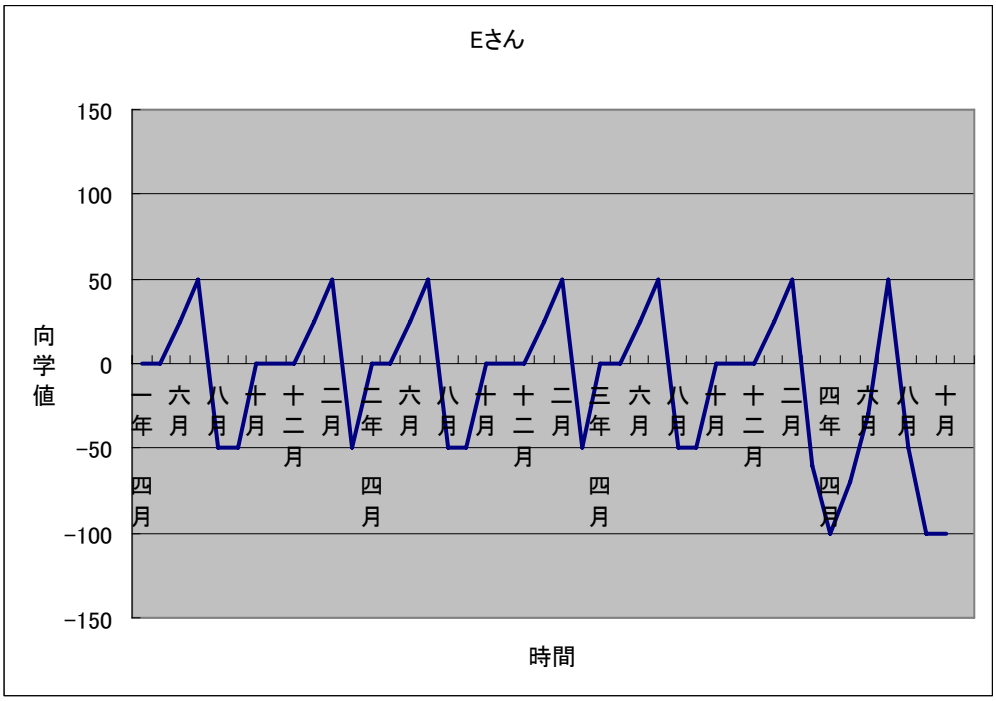
・三年：「一・二年で単位が多く取れて、一日の授業数が減ってきたから、行かなくてもいいかって思った」「テストの時だけがんばってた」

・四年四月～七月：「二・三年で何気なく落としていた選択必修科目を取らないとまずい、と思ってがんばっていた」

・四年十月：「もう取る単位もないから気楽」

・一年から四年の間で、テストに関しては一定水準のやる気を保っている。

・周囲からの影響は二年七月～三月の「周りもサボってるし、いいかって思った」部分である。



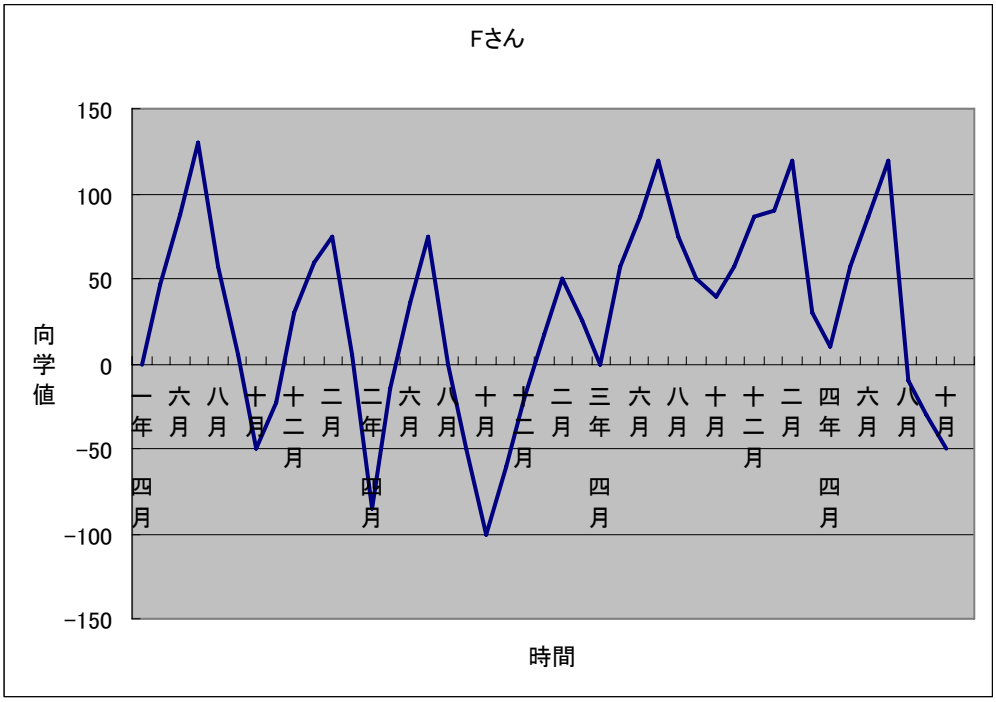
グラフ 5「個人向学グラフ E さん」

・入学～三年二月まで：「授業は出るけど寝てることが多い状態が続く」「テストの前だけがんばって他は手抜き」。一年からこれは変わらないよう。三年になって授業数が減ってきても「落としてもう一回受けるのは嫌だし」一年の時と同じくらいの意識でテストに臨んだようだ。また友達がサボるのを見て自分もサボるなどの、周囲の人間の影響はなかったと答えている。

・三年三月～四年五月くらいまで：就職活動によって、相対的に授業への意識は低くなる。「(今しかがんばれない) 就職活動のほうが大事だから、授業は休んでた」

・四年六月以降：テストはこれまで通り、一定量勉強し卒業必要単位を揃える。それ以降は勉強に対する関心は強くないため、卒業単位に関係ない授業を取ろうとは思わなかった。

・授業にもテストにも、一定の積極性を持っており、それが大学生活の中で変動することはなかったよう。周囲からの影響もなかったと答えている。



グラフ 6「個人向学グラフ F さん」

・入学～一年七月まで:「大学入りたてで、どれくらい勉強していいかわからなかったから」。

・一年八月～十月 :「少し手を抜こうかと思った」「そんなに勉強しなくてもいいな（七月のテストの感触から)」

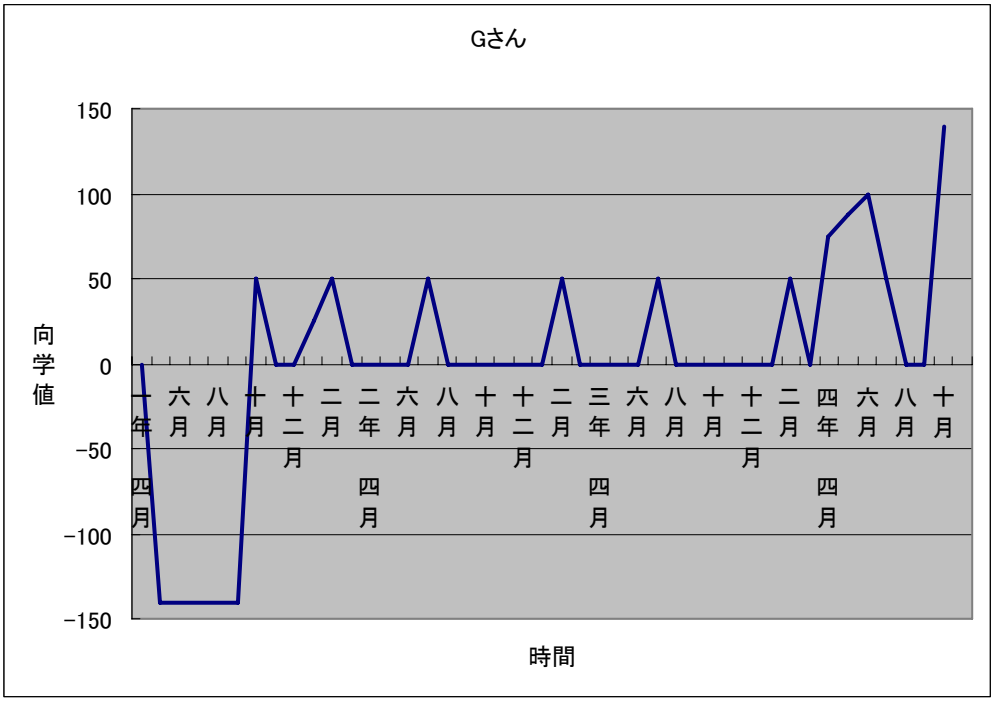
・一年十月半ば～一年二月まで:「教職科目が増えた。自分で取ろうって思ったものだから、授業には行かなきゃって思った」「二回これをやるのはキツイと思い、一発で合格したかった」

・一年三月から二年三月まで :「テストは何とかがんばったけど、それ以外の授業は部活の試合を中心に」どんどん意識は下がっていたようだ。

・三年四月～四年七月まで : 動きとしては二年の頃と似ているが、位置が高い地点にある。「要領がわかってきた」「部活に（そこまで）影響されることなく授業に行こうっていう気持ちがあった」

・四年八月～十月 :「卒業必要単位は全部揃ってあとは教職のみ。学校行く日が少ないから、」たまに行くのが面倒くさい」

・大学生活を通して、授業に行くことを負担に感じる時期はありつつも、サボってはいないと言う。周りの友人がサボりだしても、出席していたと言う。



グラフ 7「個人向学グラフ G さん」

・入学～一年九月まで：「大学は勉強しなくていいものだと思っていた」「先輩からそう聞かされていた」「それを真に受けすぎて（大学入りたてでわからなかったから）、ホントにぜんぜん学校行かなかった」「テストも受け忘れるレベル」

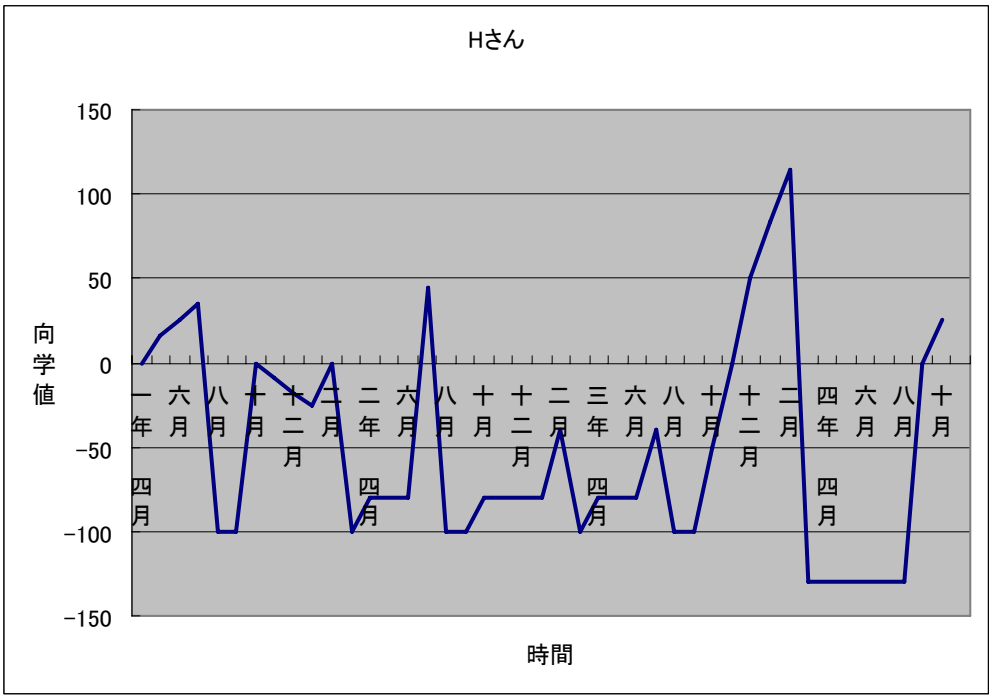
・一年十月：「成績が返ってきてやばいな、と思った」「先輩に『それはやばすぎ』だと言われてなおやばいと思った」

・一年十一月～三年三月まで：「（一年）十月ほどの危機感はなくなって怠け癖も出て、たまに授業を休むことはあったけど、一年春学期よりはるかに意識は高まった。テスト間近はいつもよりちゃんと授業に出ようと思った」

・四年：「自分にとって興味のある授業を見つけることができた」「秋学期とかは、そういう授業ばかり取った。中には卒業単位に入らないものもある」。勉強自体への関心が高まったことで、授業に対する意識も高まった。

・ゼミも自分の興味のあるもので、卒論テーマもそうであるはずなのに、なぜ遅れてしまった（やる気がなかった）のか？→「授業は受身で聞いてればいいけど、卒論は自分で動かなければならなかった（それだけの積極性はなかった）」と、一回目のインタビューで A さんが答えたことと同じことを言っている。

・周囲の影響は一年の時点で顕著に見られる。「（先輩から聞いて）大学は勉強しなくていいものだと思っていた」「（成績が返ってきて）先輩に『やばすぎ』だと言われてなおやばいと思った」など。それ以降は、「周りもサボっているから、自分も…ということはなかった」。



グラフ 8「個人向学グラフ H さん」

・入学～一年七月まで：「大学がどういうものかわからなかったから、がんばってた」

・一年七月～三月まで：「大学に慣れてきて、『授業だるい』っていう気持ちに任せてたまにサボるようになった。周りもサボりだしたし」「テストの時だけがんばった」

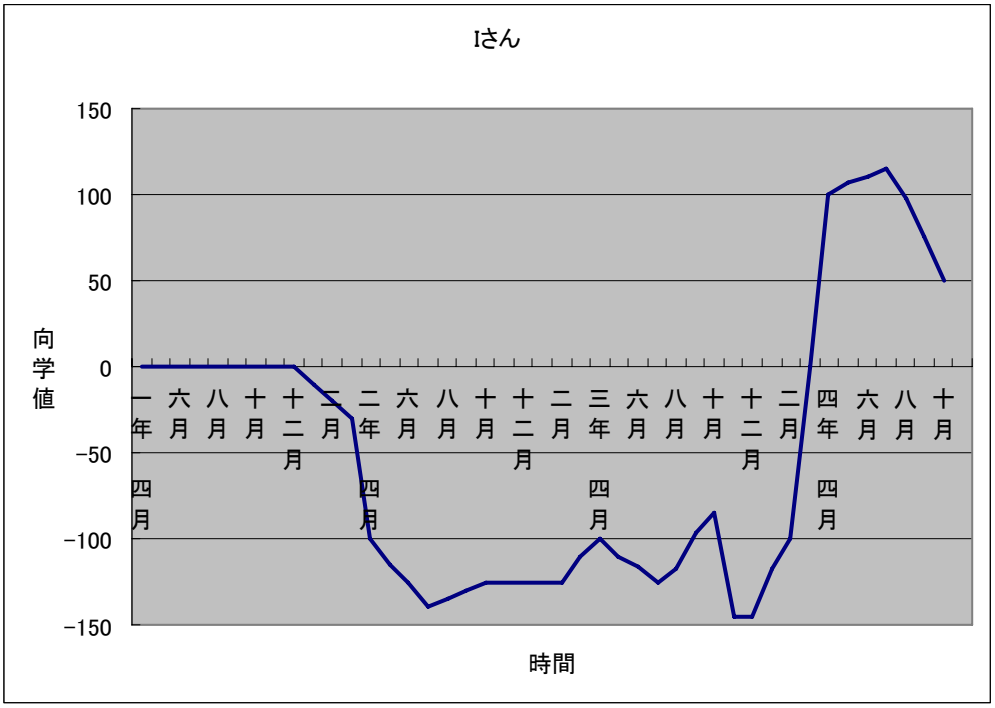
・二年四月～七月まで：「一年の後期に怠けた分を取り戻すために、一年の前期くらいにがんばった。テスト前だけだけど…」

・二年七月～三年九月まで：「また『授業だるい』って思っちゃった。周りもサボっているから、そいつらと授業サボって遊んでた」「一年の秋学期より悪化してるな」

・三年十月～二月まで：「今までのツケと、『この後就活があるから、今しか授業がんばれない』と思ってがんばった」

・三年三月～四年十月：「就活中は授業まったく行かなかったし、もともと行く気もなかった。だって就活の方が重要だと思ったから」。就職活動は五月くらいに終了したが、その後の授業は惰性で行かず、テスト期もグラフが上昇することはなかったようだ。十月になって「残りの単位を取らなきゃ」と思い、「まじめに授業に行ってる」ようだ。

・周囲の影響は一年七月～三月と、二年七月～三年九月の部分で、自分が「授業だるい」って思っているところに、「周りがサボっている」という影響が加わった「安楽指向」タイプのもの。一年七月～三月に比べて、二年七月～三年九月の方が影響の度合いが高く、グラフの下降が顕著。



グラフ 9「個人向学グラフ I さん」

・入学時の状態：「高校のころはやる気あったんだけど、大学が始まるまでに親とか友達から『大学は勉強しなくていい』みたいなこと言われてやる気なくしてた」。それが十二月ごろまで続く。

・一年一月～二年七月まで：「バイト始めて彼氏もできて、やることがどんどん増えていった。でも結局どれもうまくいかなかった気がする」。授業への出席も「うまくいかなかった」もののうちの一つらしい。

・二年八月～二年二月まで：「夏に旅行に行ったことでリフレッシュできた」「だから授業に対してもちょっと持ち直した。ちょっと…」

・二年二月～三年四月まで：「今まであまりに授業行ってなかったからがんばらないと」

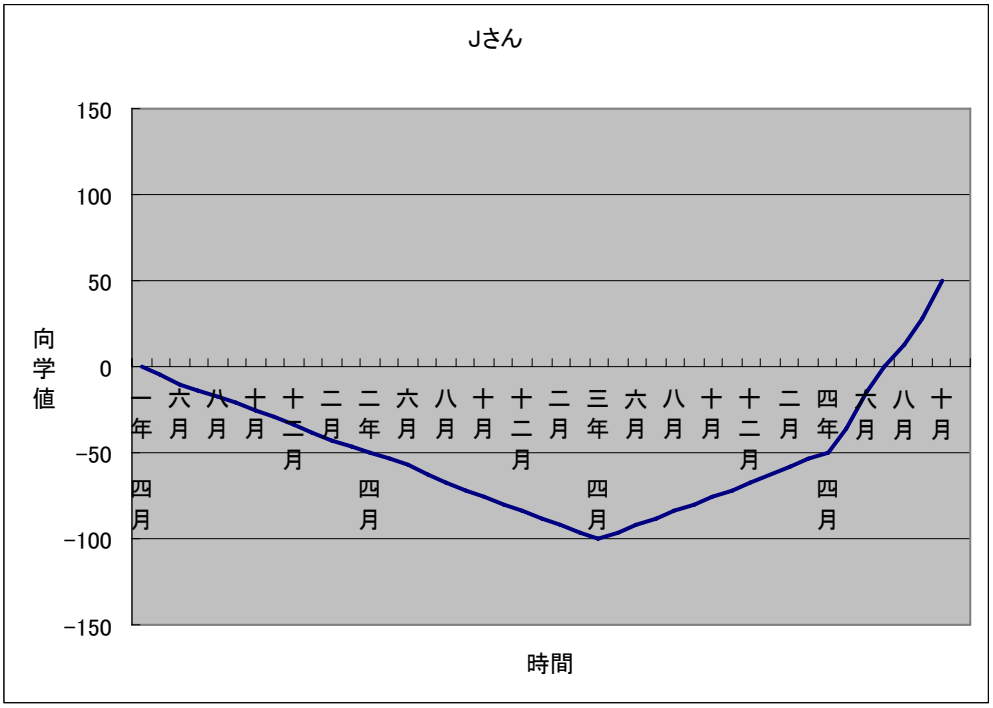
・三年五月～三年七月まで：「でもいまさらがんばれない…」「これまで授業に出てないから、ほかの人との差を感じて嫌だった」

・三年八月～三年十月：「旅行してリフレッシュ」「秋こそは授業行こうと思った」

・三年十一月～二月：「やっぱりがんばれない」「卒業無理な気がした」「大学辞めたい」

・三年三月～四年七月：「バイトの友達がアドバイスをしてくれた」→「自分のやりたいことは大学を卒業してからでもできる」「やっとがんばれた」

・様々な部分で周囲の影響を受けている。入学時まで（大学が始まるまでに親とか友達から『大学は勉強しなくていい』みたいなこと言われた）、一年一月～二年七月（彼氏ができて）、三年五月～三年七月（授業に行くようになったけど、ほかの人と差を感じて）、三年三月～四年七月（友達のアドバイス）など。友人がサボったから自分も…とは思わなかった。



グラフ 10「個人向学グラフ J さん」

・入学～二年三月まで：「入学した時点ではちゃんと行かなければ、と思ってたけど、実際に授業出てみて、それほどがんばらなくても大丈夫そうだと思った」「三年になるまでその気持ちが続いた（悪化していった）」

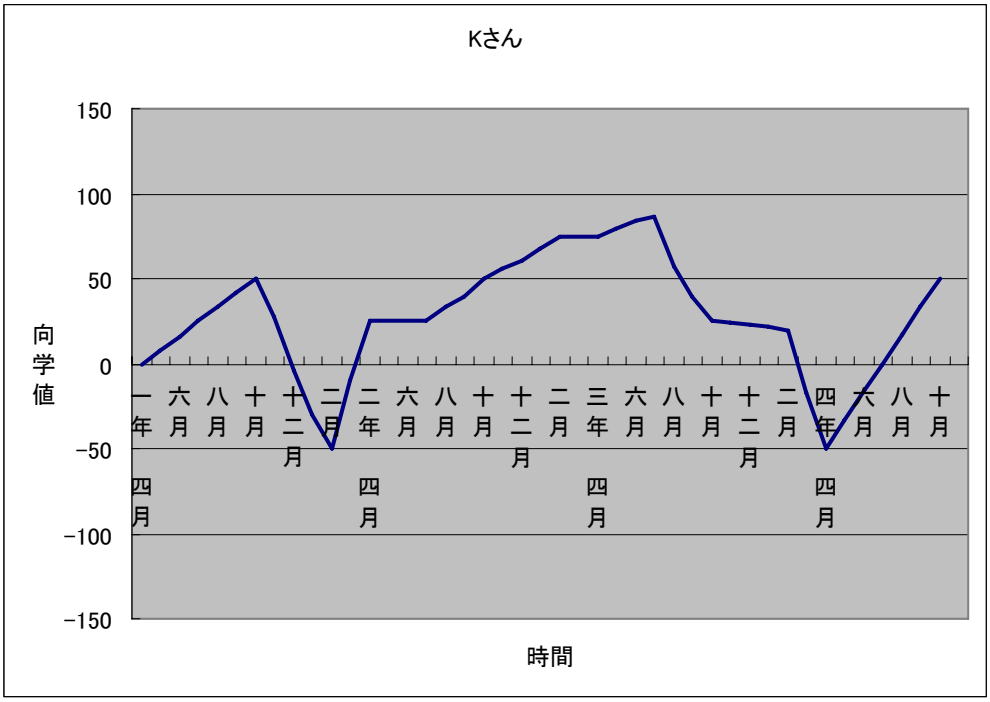
・三年四月～三年十二月まで：「このままじゃやばいと思った」「割と単位取れてない」「今までサボりすぎた」「そろそろ就活あるし」

・四年四月～四年十月まで：「もっとがんばらないと」「卒業が危ない」

・「意外と就活の影響はなかった」「というか単位がやばくて、就活中も授業行かなきゃだった」

・テストの影響も特になかった。テスト前だから「がんばって行く」ということもなかった、と言う。

・周囲の影響はなかったと思う、と言っている。「周りはまじめに行ってたもん（自分はサボっていたけど）」



グラフ 11「個人向学グラフ K さん」

・入学～一年十月まで：「授業に対する期待があった」「今はあんまり面白くなくてもそのうち面白くなる」。所属学部が第一志望のものであったため、勉強に対する意欲が、授業の積極性にも表れている。

・一年十月～一年二月まで：「部活が忙しくなってきた」「授業がわずらわしいと思うことがあった」「春学期ほどの（授業への）期待がなかった」。意識として部活の占めるウェイトが高くなり、相対的に授業への意識が下がったよう。

・一年三月～二年三月まで：「テストがぜんぜんできなかった」「親に『成績に影響があるなら部活やめろ』と言われた。そのため授業への積極性が高まり、加えて七月のテストの成績がよかったため「秋はもっとがんばってみようかな」と思ったと言う。

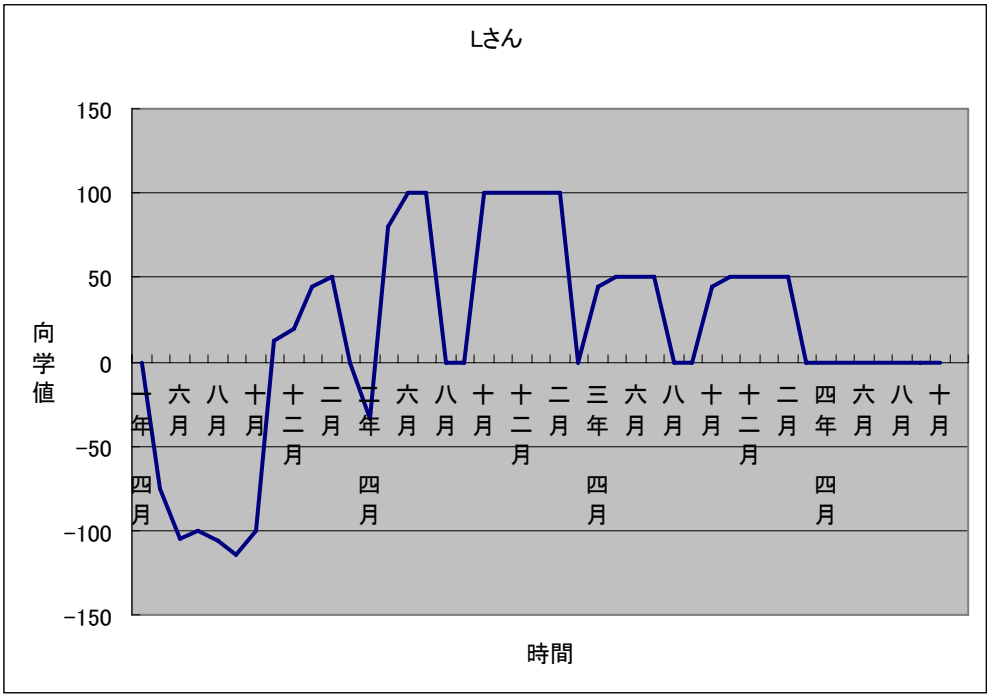
・三年四月～七月まで：「自分のやりたかった授業が多かった」勉強自体への関心の高さが授業への積極性にも表れている。

・三年八月～三年二月まで：「就活を意識しだして、授業はいいかな、って思った」

・三年三月～四年六月まで：「就活が一番きつかった時期」。物理的にも意識的にも、「授業どころではなかった」と言う。

・テスト直前に授業への意識が高まることはないようだ。

・周囲の人間の影響は一年三月～二年三月の、「親に『成績に影響があるなら部活やめろ』と言われ」、授業への積極性が高まった部分。周囲の人間がサボっているから、自分も…という気持ちはなかったと言う。



グラフ 12「個人向学グラフ L さん」

・入学～一年十月まで：「大学は勉強しなくて大丈夫だって思っていた」「高校の友人に聞いていたが、入学してさらにその思いは強まった」「学科の友達と一緒にサボっていた」「大学入って勉強しようっていう意識もなかった」

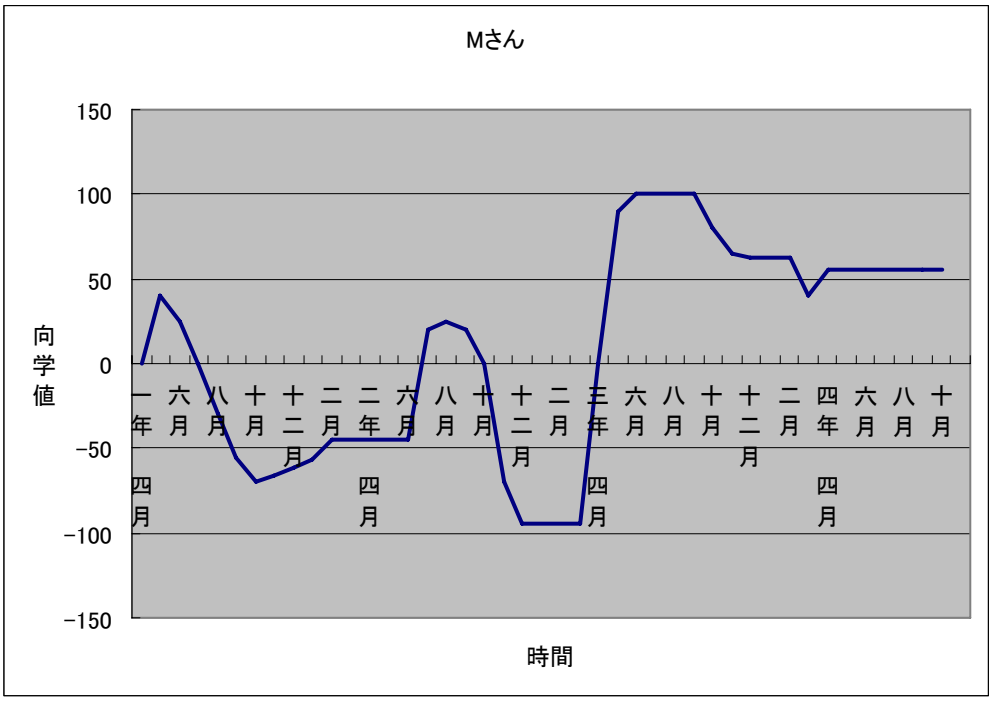
・一年十月～三月まで：「試験結果を見て『がんばらなきゃ』って思った」

・二年：「(一年）春学期に比べれば（一年）秋学期がんばったけど、成績あんまりよくなくて親に怒られたから、さらにがんばろうと思った」「サボらず授業に行くようになった」

・三年：「単位がある程度取れて『あとは余裕だろ』って思った」。取るべき単位が少なくなったことによって、授業への積極性が弱まった。

・四年：「さらに授業が少なくなって、さらにやる気が…」

・周囲の人間の影響は入学～一年十月の「学科の友達と一緒にサボっていた」、二年の「親に怒られたから、さらにがんばろうと思った」の部分。前者はもともと自分も「大学は勉強しなくて大丈夫だって思っていた」というように「安楽指向」タイプのもの。後者はそれ以前に「試験結果を見て『がんばらなきゃ』って思った」とあるように、もともと「がんばる」方向に向かっていた（「同調指向」タイプのものではない)。



グラフ 13「個人向学グラフ M さん」

・入学～一年五月まで：「大学入りたてで、がんばろうとちょっと思っていた」

・一年五月～一年十月まで：「そんなにがんばらなくても大丈夫って思った」「マイペースでいこう」「周りは皆まじめに授業出てるなぁって思ってた」

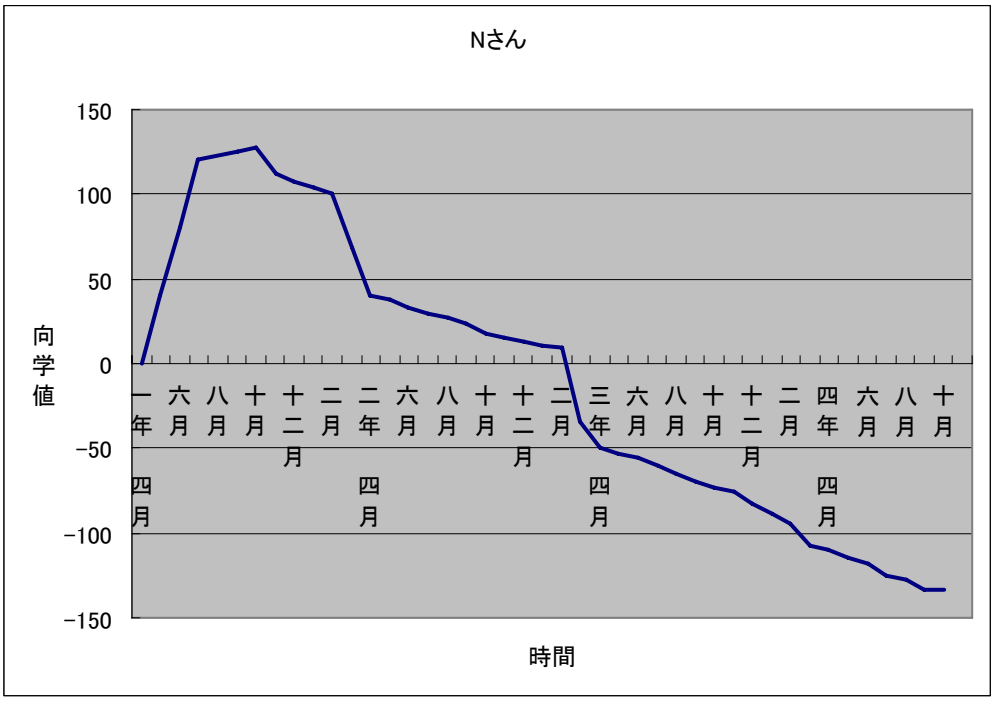
・一年十月～二年七月まで「まじめに行かないとやばいような授業が多かった」「一年の頃の遅れを取り戻そうと、テスト前は特にがんばった」「『田辺返し』は嫌だし」

・二年八月～二年三月：「春の勢いでがんばろうと思ったけど思うだけだった…」「『田辺返し』の危険がなくなったので、テスト前も特にがんばらなかった」

・三年四月～七月：「自分にとって興味のある授業が多かった」。勉強自体への関心の高さが授業への積極性にも表れている。

・三年八月～四年十月：「春ほどではないが、授業は興味のあることだったので、ちゃんと行こうと思った」「四年になってからは、『もう後がない』と思いがんばっている」「就活の影響は特になし」

・周囲の人間がサボっているから、自分も…という気持ちはなかったと言う。



グラフ 14「個人向学グラフ N さん」

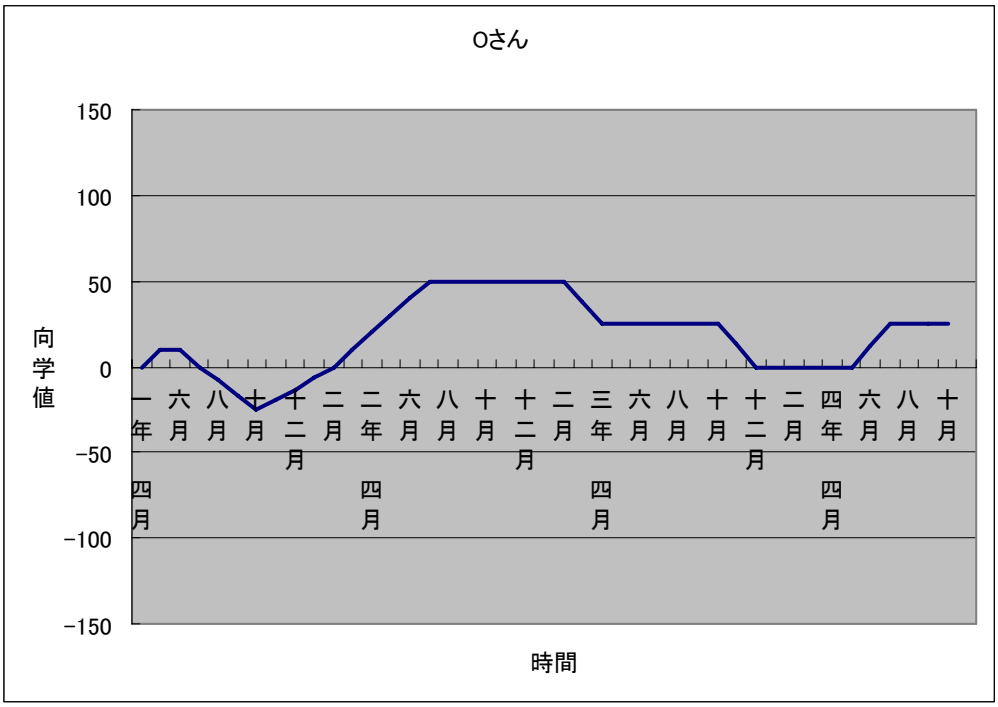
・入学～一年十月まで：「要領がわからんからがんばった」

・一年十一月～二年三月まで：「勉強しなくても大丈夫だって思った」「そのため授業をサボるようになった」「勉強あんまりやらなくても、成績が悪くなるだけで、受かりはするから、テスト前も特にがんばって授業行こうとはしない」

・三年～四年十月まで：「単位もだいぶ取れたからそんなにがんばらなくていいや」「授業数が少なくなったので、それだけのために学校に行くのはだるい」

・「就活の影響は特になかった」

・周囲の影響でサボったわけじゃないと思っている。自分が「面倒くさい」「だるい」って思ったからだと言っている。



グラフ 15「個人向学グラフ O さん」

・入学～一年六月まで：「まじめに行けてた」「周りが結構ちゃんと行っていたから」「部活も忙しかったけど、部活もやってるからこそ、授業もちゃんと出るっていう気持ちが強かった」

・一年七月～一年十月まで：「部活がどんどんしんどくなった」。部活の影響で相対的に授業への積極性が下がった。

・一年十一月～一年三月まで：「授業へ出ることがそんなに苦だと感じなくなるくらい、部活のしんどさに慣れた」

・二年四月～二年二月まで：「周りにすごい勉強してる人がいて、自分もやらなきゃなって思った」

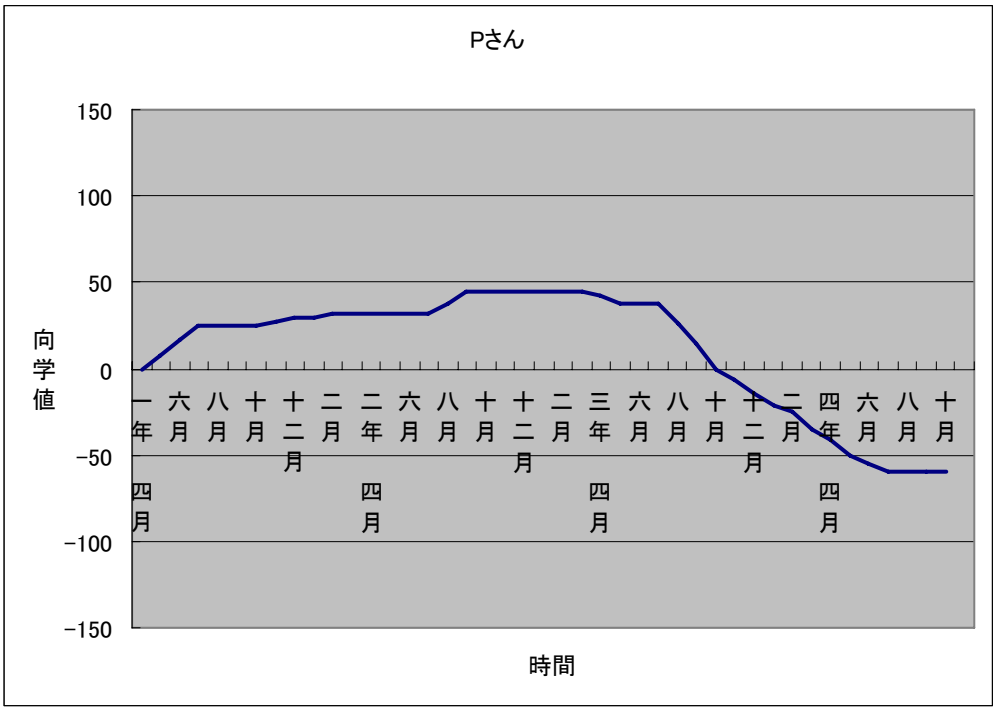
・二年三月～三年十月まで：「授業の関係で、すごい勉強してる人達とあまり会わなくなった」「就活、公務員試験を意識し出して、相対的に授業への意識は下がった」

・三年十一月～四年六月まで：「就活、公務員試験のほうに意識が行ってしまった」「周りが真剣に就活してるのを見て」

・四年七月～四年十月まで：「就活が終了し、授業への積極性が戻った」

・様々な部分で周囲の影響を受けている。入学～一年六月「周りが結構ちゃんと行っていたから」、二年四月～二年二月「周りにすごい勉強してる人がいて、自分もやらなきゃなって思った」、二年三月～三年十月「授業の関係で、すごい勉強してる人達とあまり会わなくなった」、三年十一月～四年六月「周りが真剣に就活してるのを見て（相対的に授業への積極性が低下した）」

・周りがサボっているから自分も…とは思わなかったと言う。



グラフ 16「個人向学グラフ P さん」

・入学～一年十月まで：「(大学で) ちゃんと勉強したいと思ってたし」「自分のやりたい学問だったから」。勉強への意識の高さが、授業への積極性にも表れている。

・一年十月～二年七月まで「『勉強学会』みたいなところに入ってさらに勉強に対する意識が高まった」

・二年八月～二年三月まで：「夏に教授に誘われ、研究旅行に同行した」「自分のやりたいことを追究するために、編入を決める」

・三年四月～三年九月まで：「編入したが、授業は専門の科目ばかり行けばいいというものではなかった」から、以前に比べて相対的に授業への積極性は低くなっている。

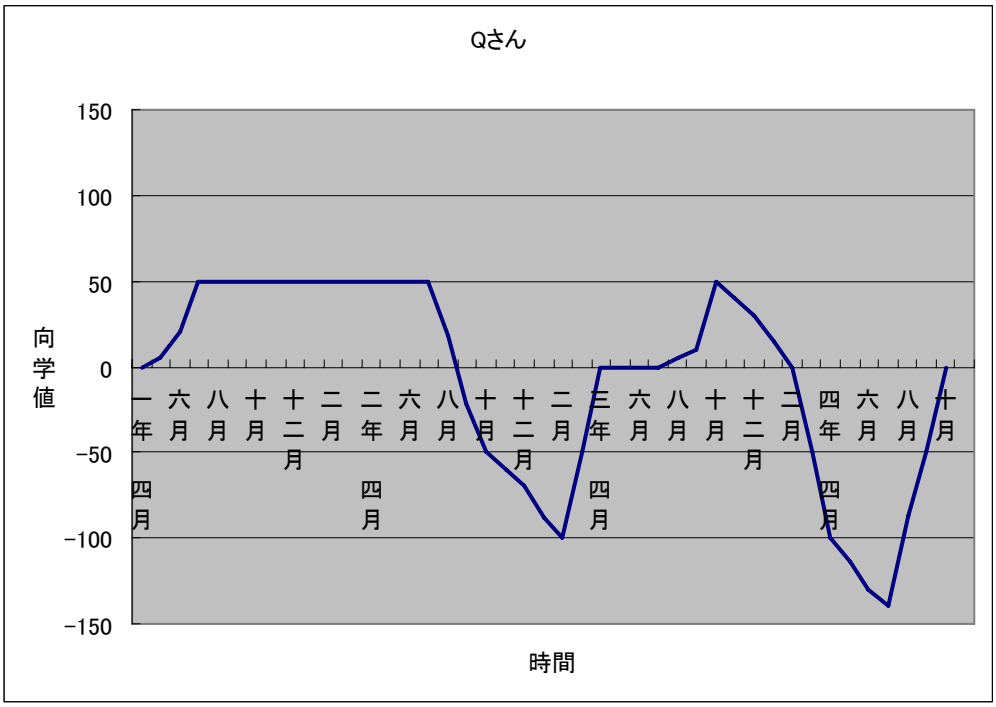
・三年十月～四年七月まで：「就活意識が高まり、相対的に授業への意識は下がった」

・四年八月～四年十月まで：「とりあえず就活が終わり、ほっとしてる」

・テスト前だけにがんばって行こうという意識はなかった。

・周囲の影響は一年十月～二年七月「『勉強学会』みたいなところに入ってさらに勉強に対する意識が高まった」、二年八月～二年三月「夏に教授に誘われ、研究旅行に同行した」の部分。どちらも「自分が勉強したい」と思っているところに周囲の影響が加わり、さらに気持ちが高まっているパターン。「同調指向」タイプではない。

・周りがサボっているから自分も…とは思わなかったと言う。



グラフ 17「個人向学グラフ Q さん」

・入学～一年六月まで：「勉強に対する関心高かった」「入りたかった学部だから」「でもサークル活動も楽しかった」

・一年七月～二年七月まで：「授業とサークルの楽しさを両立できていた」

・二年八月～二年二月まで：「サークルの役職に就いてしまったため、サークル活動のほうに意識を奪われ、授業とサークルの両立ができなくなっていった」「上級生と下級生の間の中間職が大変。疲れてしまって授業をサボることも多かった」「その際、サークルの友達にサボろうって言われて、一緒にサボっていたりした」

・二年三月～三年九月まで：「三年のサークルの役職は苦ではなかった。忙しくはあったが、二年の秋ほど、意識を奪われるということはなかった」

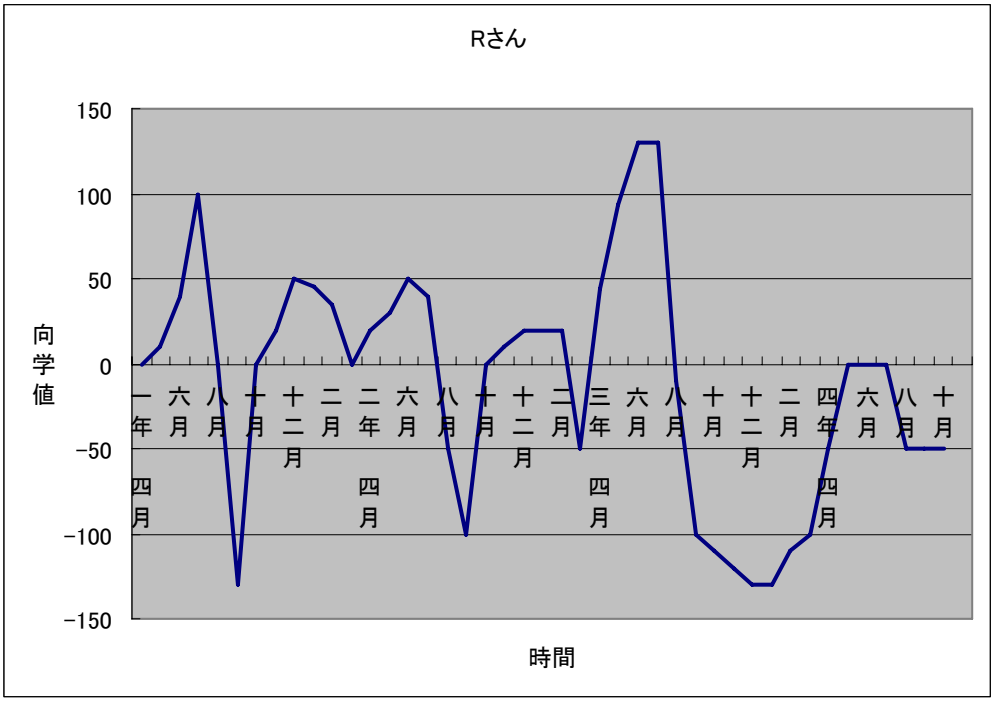
・三年十月～四年七月まで：「秋学期は自分の好きな科目が多かったから、まじめに授業に出ようと思ったが、すぐに就活に興味が移ってしまった」「四年の六月まで就活で授業に出ようっていう気持ちはどんどん下がっていった。その間に付き合っていた彼女とも別れて、授業どころではなくなっていった」「テストすら受けに行かなかった授業もあった」

・四年八月～四年十月まで：「失恋のショックも回復してきて、大学を卒業しなきゃっていう焦りから、授業に出ようっていう意識は高まっている」

・テスト前だけにがんばって行こうという意識はない。

・周囲の影響は二年八月～二年二月「サークルの友達にサボろうって言われて、一緒にサボっていたりした」、三年十月～四年七月「付き合っていた彼女とも別れて、授業どころではなくなっていった」の部分。どちらも授業への消極要因として「サークルの役職」「就活」が本人にあったことから、「安楽指向」タイプである。また一年の春は「一緒にサボる友達

がいなかったから、サボろうとは思わなかったのかも」と言っている。



グラフ 18「個人向学グラフ R さん」

・入学～一年七月まで:「大学生だから勉強しないとって思って授業にはちゃんと出ていた。周りもちゃんと出てたし」「どのくらい勉強すればいいかわからなかった」「テスト前は特にがんばった」

・一年八月～一年三月まで:「春学期の単位を少し落としていたから、もうちょっとがんばろうと思ったけど、長続きしなかった」「朝起きれない、だるい、学校遠いっていう気持ちに任せてしまった」「周りもサボっていたから、自分も大丈夫だろうって思った」

・二年四月～二年七月まで:「また単位を落としてしまったので、がんばろうと思った。テスト直前は息切れしてあまり授業出てなかったけど、それまではちゃんと授業出てた」

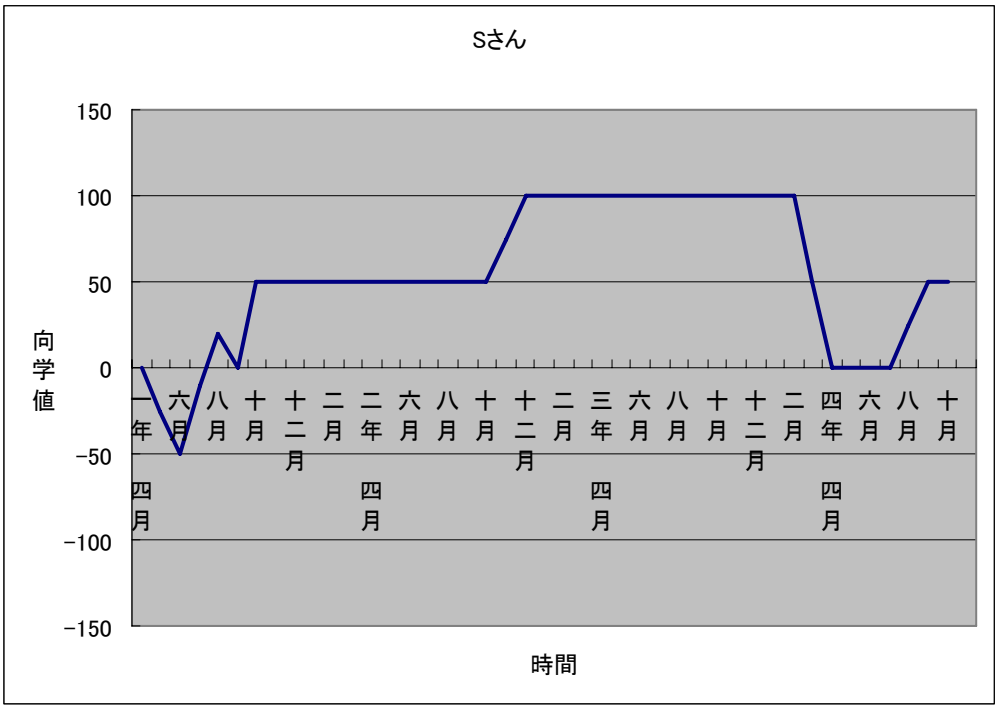
・二年八月～二年二月まで:「春学期フルタンだったので、少し安心してしまった」

・二年三月～三年九月まで:「下宿生になって『家が遠いから授業出れない』っていう言い訳が自分に使えなくなってしまった。だから『出なきゃ』と思ったし、実際それまでに比べて授業行くことが苦ではなかった」

・三年十月～三年三月まで:「単位がだいぶ取れてた。だから『もうそんなにがんばって行かなくてもいいよね』って自分に言い訳できてしまった。下宿生ならではの遊びのほうに意識が行ってしまい、授業はサボりがちになる」

・四年四月～四年七月まで:「就活が始まって、規則正しい生活ができるようになったので、むしろ授業には『行ける時は行く』っていう意識が持てた。三年秋学期は夜遅くまで遊ぶことが多かったから、最初から授業出ることを諦めているときもあった」

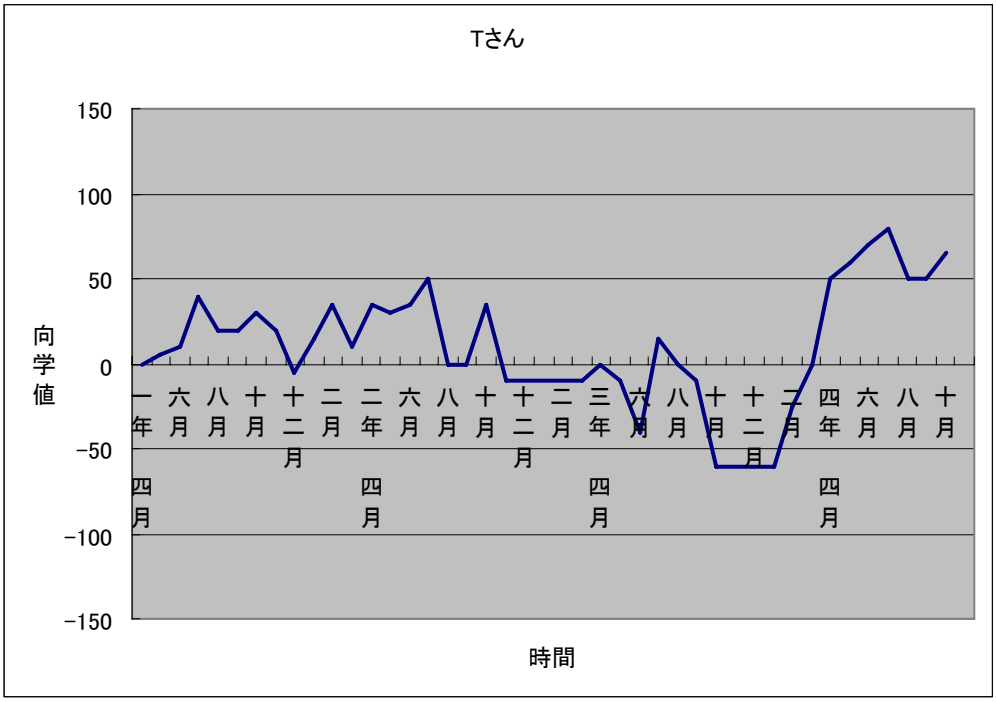
・四年八月～四年十月まで：「就活が終わってまた遊ぶように…。でも卒業がかかっているから、三年の秋よりは授業出てる」
・一年秋学期～二年秋学期までの下降線は、「『家が学校から遠いから』っていう理由が大きい」と話している。
・周囲の影響は一年八月～一年三月「周りもサボっていたから、自分も大丈夫だろうって思った」部分。もともと「家が遠くて学校に行くの面倒くさい」という授業への消極要因が本人にあったことから「安楽指向」タイプのものである。



グラフ 19「個人向学グラフ S さん」

・入学～一年七月まで：「受験が終わってほっとしてた」「自分のペースでやればいいやと思ってた。春はゆっくりしたかった」「テスト前だけは少しがんばった」
・一年八月～二年九月まで：「春はゆっくりしたから、これからはちゃんと授業を受けようと思った。入りたくて入った学部だし」
・二年十月～三年三月まで：「授業が難しくなった。だからこそちゃんと出席しないといけないと思った」「学部の友達もしっかり出ようっていう感じだったし」
・四年四月～四年七月まで：「公務員試験があったので、相対的に授業への意識は弱まった」
・四年八月～四年十月まで：「公務員試験も終わり、卒業必要単位もすべて取り終えた。授業は趣味のものだけ取っている」「取らなくても卒業はできるから、以前ほどきちんと出席しようっていう意識はない」

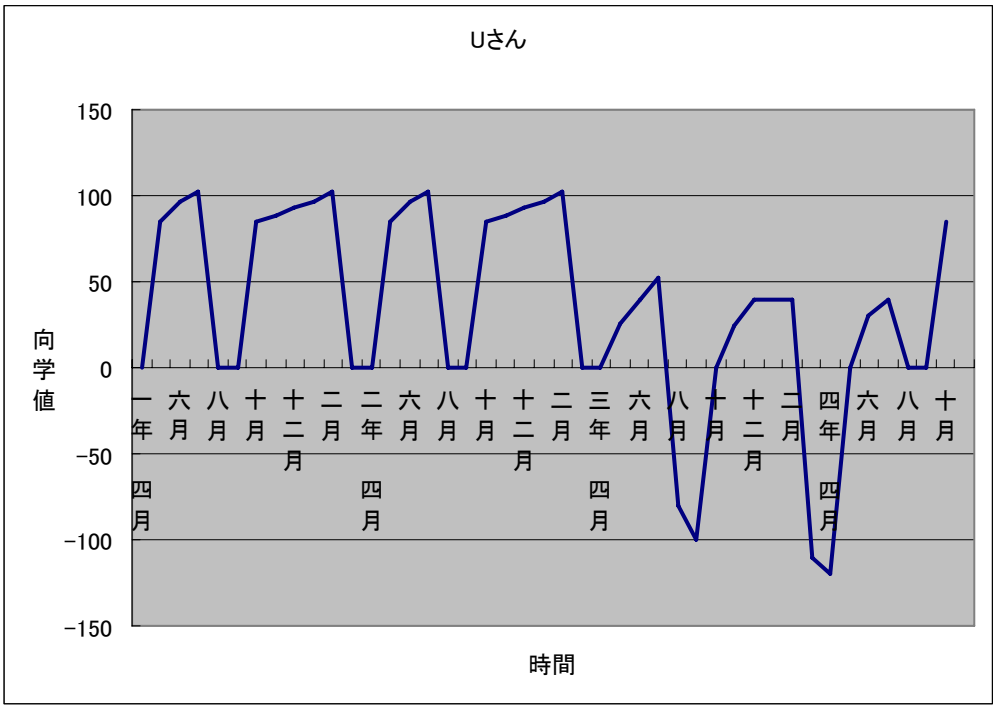
・周囲の影響は二年十月～三年三月「学部の友達もしっかり出ようっていう感じだったし」の部分。
・周りがサボっているから自分も…とは思わなかったと言う。



グラフ 20「個人向学グラフ T さん」

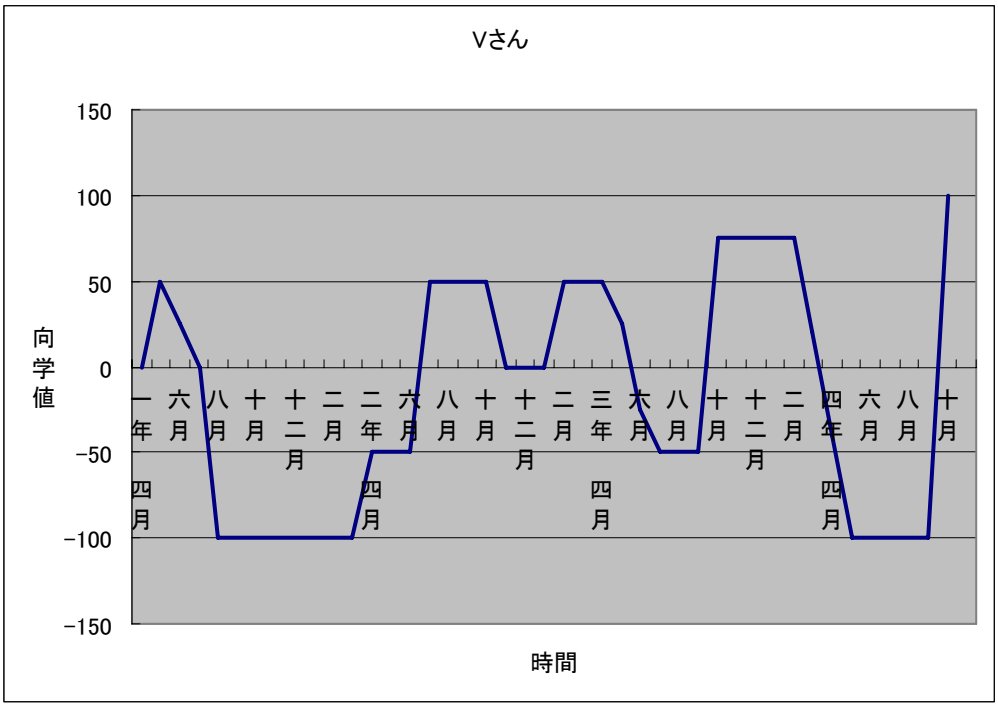
・入学～一年七月まで：「入りたてでちゃんと授業出てた。テスト前は特にがんばった」
・一年八月～一年三月まで：「春学期のテストが楽だったから『そんなにがんばることもないか』って思ってサボるようになった」「でもテスト前は少しがんばった」
・二年四月～二年七月まで：「友達（学部）と一緒に授業受けるようになった。友達がちゃんと行ってたから、自分も出てた」
・二年八月～二年三月まで：「春一緒に受けてた友達と授業が重ならなくなった」「サークル活動が楽しくて、授業への意識が下がった」
・三年四月～三年三月まで：「友達（バイト）に誘われ自分の趣味を見つけてしまい、授業にぜんぜん出なくなった」「その友達とよく授業をサボってた」「テストだけ少しがんばった」
・四年四月～十月まで：「三年のときサボりすぎたツケで単位がだいぶ残ってる」「就活がありつつも授業でなきゃやばい、と思って出てた」
・周囲の影響は二年四月～二年七月「友達（学部）と一緒に授業受けるようになった。友達がちゃんと行ってたから、自分も出てた」、三年四月～三年三月「友達（バイト）に誘われ自分の趣味を見つけてしまい、授業にぜんぜん出なくなった」「その友達とよく授業をサ

ボってた」の部分。後者はもともと自分も授業は出る気力は弱まっていた「安楽指向」タイプのもの。



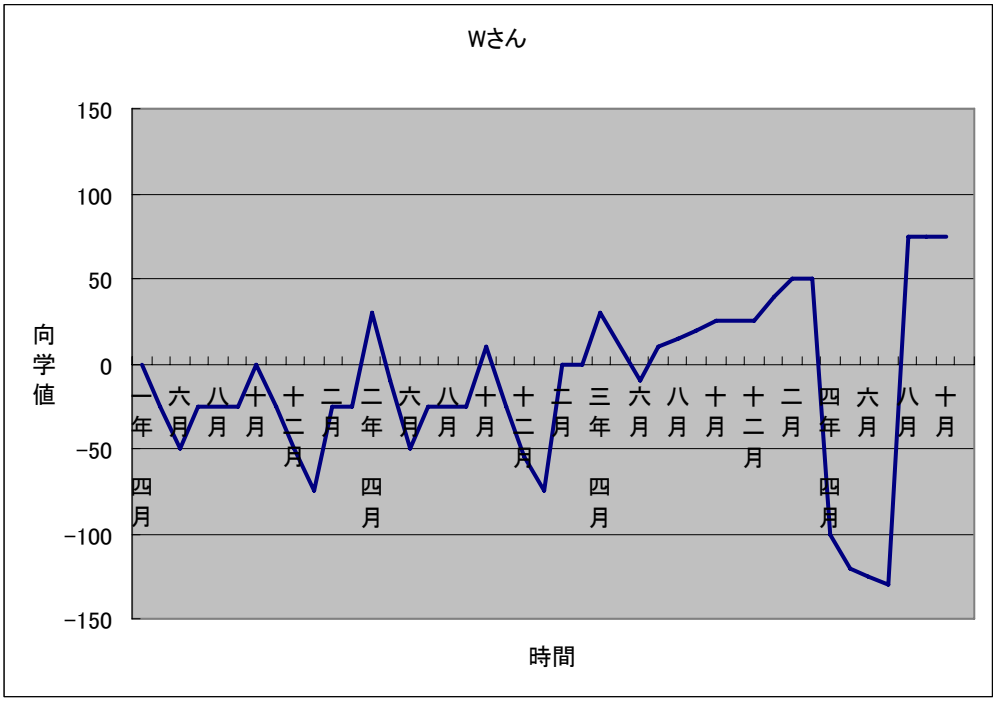
グラフ 21「個人向学グラフ U さん」

・入学～二年三月まで：「授業はよく出てた」「ちゃんと勉強しようと思って大学入ったし」
・三年四月～四年七月まで：「公務員試験と就活があったから、意識的にも時間的にも以前ほど授業には出ていなかった」
・周りがサボっているから自分も…とは思わなかったと言う。



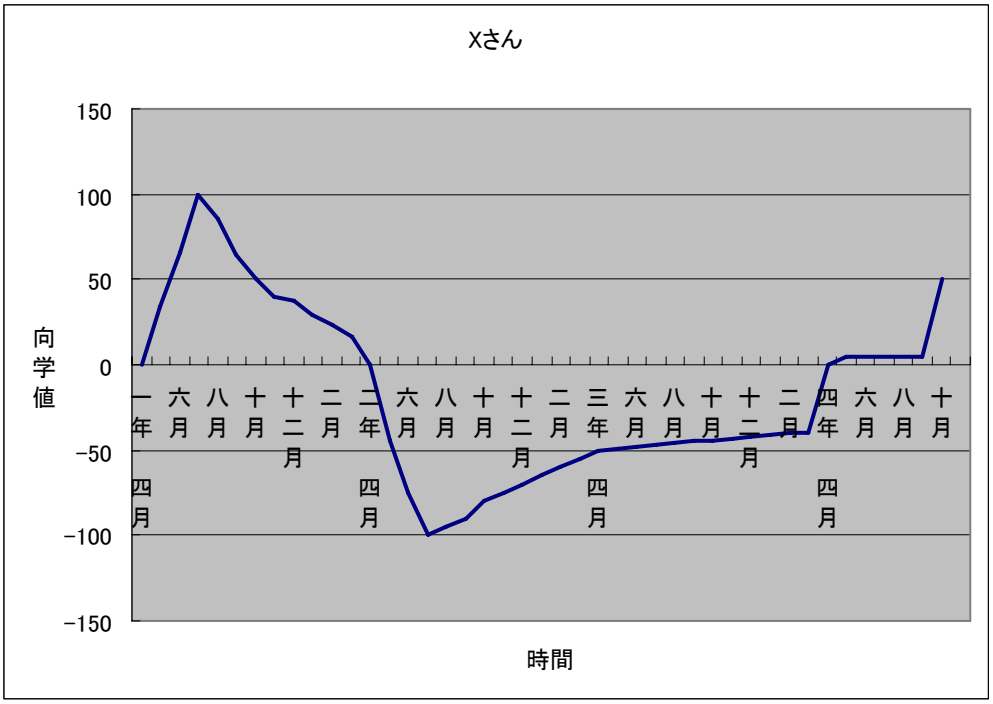
グラフ 22「個人向学グラフ V さん」

・入学～一年五月 :「せっかく大学入ったし、勉強しようかなぁって思った」「大学の授業は面白いと思っていた」
・一年六月～一年三月 :「授業が思っていたほど面白くなかった」「面倒くさいなぁって気持ちが強くなってきた」
・二年四月～二年三月まで :「単位がやばいと思って授業出るようになった」「必修単位が取れていなくて、田辺返しが怖かった」
・三年四月～三年七月まで :「田辺返しがなくなって安心したら、また授業出るのが面倒くさくなった。校舎が今出川になって家から遠くなったし」
・三年八月～三年二月まで :「授業で難しい科目が増えた。まじめに授業に出ないと単位取れないと思った」「共同で課題を行う授業があって、同じ班の人がぜんぜんやる気なかったから、自分ががんばらなきゃ、と思った」
・三年三月～四年九月まで :「就活とバイトが忙しく（物理的にも精神的にも）て、授業に出れなかった」「周りも就活で授業出てないから、自分も出なくていいと思った」
・四年十月 :「もう単位を落とせないという焦り」
・テスト前だけにがんばって行こうという意識はない。
・周囲の影響は三年八月～三年二月「共同で課題を行う授業があって、同じ班の人がぜんぜんやる気なかったから、自分ががんばらなきゃ、と思った」、三年三月～四年九月「周りも就活で授業出てないから、自分も出なくていいと思った」部分。後者はもともと本人も授業に行くつもりはなかったので「安楽指向」タイプのもの。



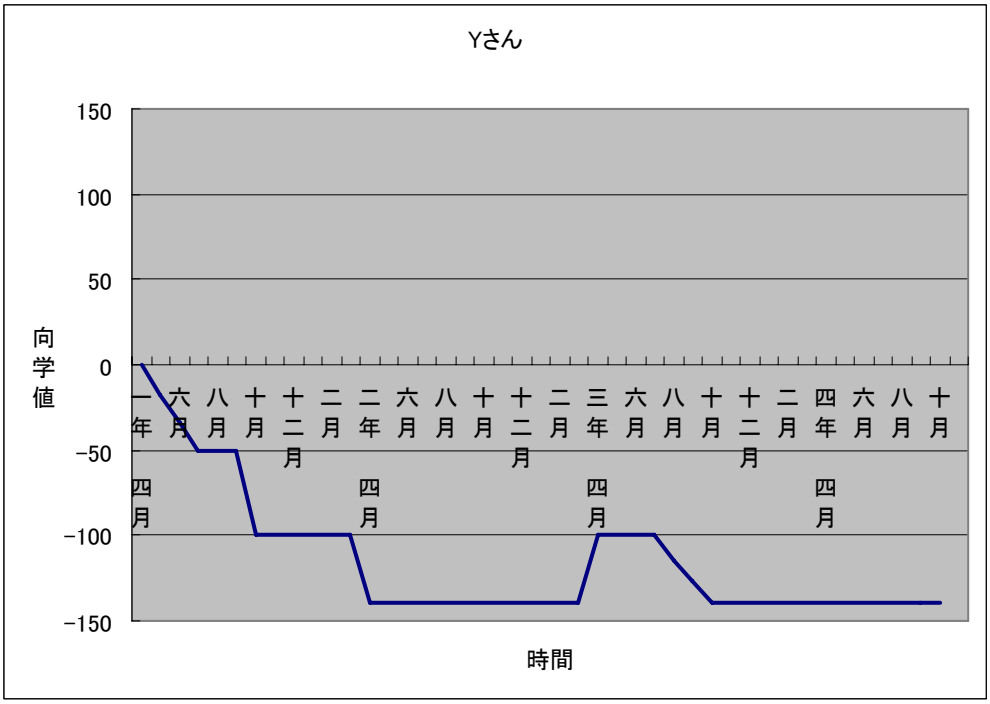
グラフ 23「個人向学グラフ W さん」

・入学～一年七月まで：「授業内容に興味が持てなかった」「大学家から遠いし、行くの面倒だった」「テスト前だけ少しがんばった」
・一年八月～一年三月まで：「秋学期になって心を入れ替えて授業に出ようと思い直したけど、長続きはしなかった」「家から遠いっていうことと、まだ一回だからそんなに焦ることもないだろう、て思ってた」「テスト前だけ少しがんばった」
・二年四月～二年三月まで：「基本的に一年のときと同じ。学期始まりに気持ちをリセットするんだけど、いつも持続しない。テスト前だけ少しがんばります」
・三年四月～三年七月まで：「単位があまり順調に取れてないのでさすがにやばいと思って、今回は特にテストがんばった」
・三年八月～三年三月まで：「春けっこう単位取れたから今回もがんばろうと思った」「今までで一番授業とか出てた時期」
・四年四月～四年七月まで：「就活。時間的にも意識的にも授業どころじゃなかった」
・四年八月～四年十月まで：「卒業のために授業は出ないと」
・周囲の影響は入学～二年三月までの間の下降線の部分。「周りの大学生がサボってるのを見てっていう影響が少しあると思う」「でもそんなに大きな影響じゃなくて、自分の性格が（授業をサボっていた）大部分の理由」



グラフ 24「個人向学グラフ X さん」

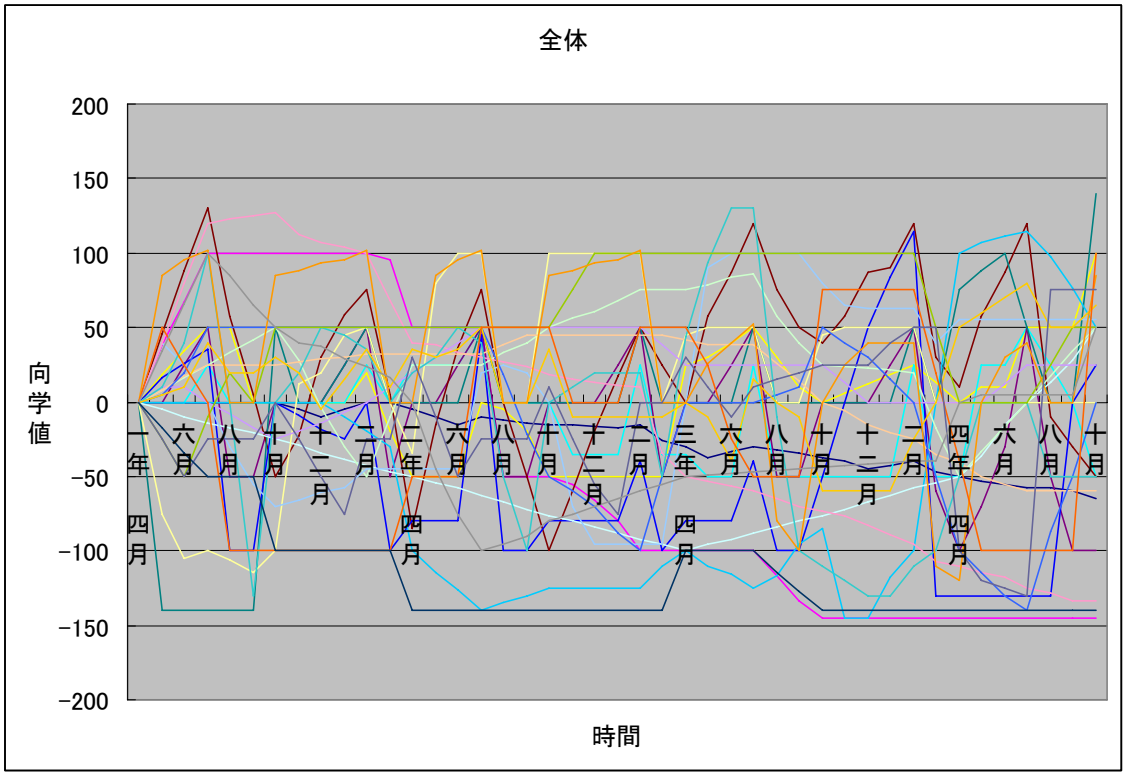
・入学～一年七月まで：「自分は指定校推薦で入学していて、単位を落とすと次の指定校枠がなくなるという噂を真に受けていて、とてもがんばっていた」「どのくらいがんばっていいかわからず、とりあえずがんばった」
・一年八月～一年三月まで：「大学に慣れてきた」「授業行かなくてもテストは通ると思い、だんだん授業には行かなくなった」
・二年四月～二年七月まで：「どんどん授業に行かなくなった」「ずっとひきこもっていた。原因はよくわからない。一年の秋学期の気持ちが悪化したのかも」
・二年八月～二年三月まで：「春学期の単位が取れてなくてやばいと思った」「友達からも授業出なよって言われた」「徐々に授業行かなきゃっていう気持ちは出てきたけど、それでもそんなに授業には出てなかった」
・三年四月～三年三月まで：「四年までに単位全部取りたかったので、嫌だったけどがんばって授業出ていた」
・四年四月～四年十月：「ここで落としたら卒業できないからがんばろう」
・就活影響なし
・テスト前だけにがんばって行こうという意識はない。
・周りがサボっているから自分も…とは思わなかったと言う。
・周囲の影響は二年八月～二年三月「友達からも授業出なよって言われた」部分。



グラフ 25「個人向学グラフ Y さん」

・入学～一年九月まで：「授業がつまらなかった」「面倒くさいと思った」
・一年十月～一年三月まで:「春あんまりまじめに授業受けてなかったのに、単位取れてた。じゃあもっとサボろうと思った」
・二年四月～二年三月まで：「一年の秋学期も単位取れていたから、もっとサボっても大丈夫だろうと思った」
・三年四月～三年七月まで：「自分にとって興味のある授業だったから、二年のときよりは授業出てた」
・三年八月～四年十月まで：「面白い授業もなかった」「三年の秋でほとんど単位は取れてしまった」
・就活影響なし
・テスト前だけにがんばって行こうという意識はない。
・周りがサボっているから自分も…とは思わなかったと言う。あくまで自分の意思で授業をサボるようになった。

以上が私がインタビューを行った 25 人の個々の向学グラフである。以下は、個々の曲線をひとつのグラフ内にまとめたものである。



グラフ 26「全体向学グラフ」

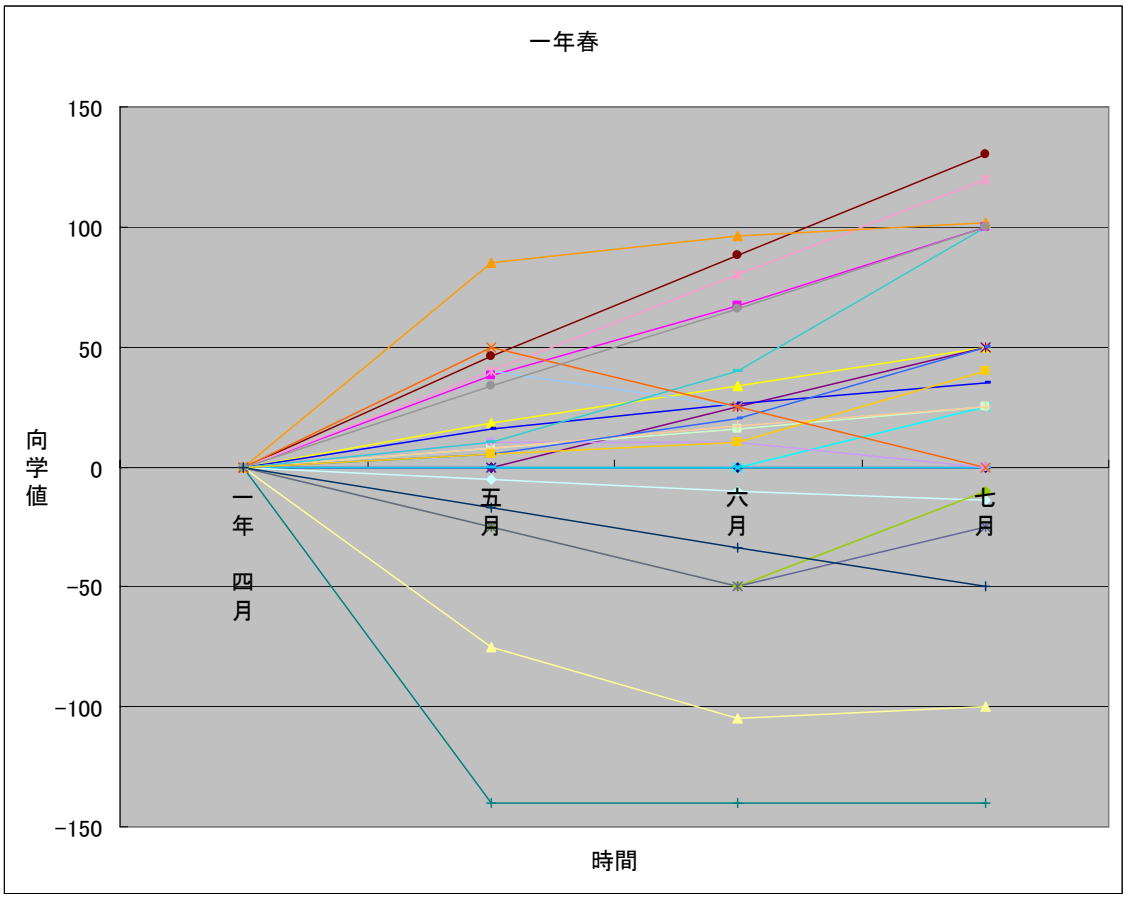
5.4 グラフ考察

・グラフ 26 から

一見して 25 人の学生のグラフの動きに、かなりばらつきがあることがわかる。A さんのように、大学生活の中で徐々にグラフが下降していることが明確なのは、A さんを含め 5 人(ABDNY)だけであり、他の学生は何らかの個人理由から、グラフが上下に揺れている状態である。以下ではグラフからわかること、インタビューからわかったことをまとめていこうと思う。また便宜上、グラフが上昇線になる理由を積極要因、下降線になる理由を消極要因と呼ぶこととする。

・入学直後はみんなまじめ？

各学生にグラフを作成してもらう際に目に付いた点は、入学直後は多くの学生がグラフを上昇線、または平行線によって描いたことである。以下の図は、グラフ 26 の入学～一年七月（最初のテスト期間）までを拡大したものである。



グラフ 27「全体向学グラフ　入学～七月」

このように 25 人中 20 人が上昇線、または平行線のグラフをとっていることがわかる。この理由として、「大学に慣れていなくて、どの程度やればいいかわからなかった(A さん)」や、「(大学に) 入りたてでちゃんと授業出れていた(S さん)」のように、高校時代とは環境が大きく変わったために、要領がわからず、とりあえずがんばった、という主旨の回答をした学生は 9 人 (ABCFHNRTX) いた。これは積極要因の中でも、多くの学生が同時期に同一回答を示した数少ない例である。このことから、多くの学生は、大学に不慣れという理由から、入学直後は積極的に授業に出席しているケースが多いということが言える。

・テストに関して

これに関しても、回答にばらつきが見られた。E、U さんのようにテストを中心にグラフを上昇させる傾向の強い人もいれば、テストとは関係なくグラフが上下する人もいる。また一時期はテスト期間に大きくグラフが上昇するが、別のテスト期間はまったく上昇傾向がない、という人もいた。これは学部、教員免許取得の有無、取得単位数などに個々の差が大きく表れるため、一定の傾向が表出しにくいためであると思われる。

・　意識影響について

授業に出席することに関しても、卒論に取り組むときと同様に、周囲の影響が学生の意識を変化させているように思われる。向学グラフを描く際に「完全に周囲の影響はなかった」と答えたのは 25 人中 4 人だけ（BJNU）であった。21 人はこれまでの大学生活の中で、何らかの周囲の影響を認識している。例えば「部活が忙しくなってきて、授業がわずらわしいと思うことがあった」という K さんや、「成績があんまりよくなくて親に怒られたから、がんばろうと思った」L さんなどがいる。その中でも周囲の影響として、多くの学生が挙げたのが、サークルや学部の友人である。「友人がサボっているから、自分もサボろうと思った」という主旨の理由を挙げた学生は、21 人中 10 人いた(ACDHLQRTVW)。周囲の友人の存在は、グラフを下降させる消極要因の主なもののひとつと言えるのではないだろうか。

5.5 考察まとめ

学生生活の中から、卒論に関する意識の傾向が見出せるかと考えたが、はっきりとした影響は見られなかった。「向学グラフの動きが、卒論進行に影響はあったか」という質問に対して「あった」と答えたのは 25 人中 4 人だけ(ABNR)で、残りの 21 人は学生生活の自分の態度と、卒論進行は関係なかったと考えているようだ。もちろん 21 人の学生が、学生生活の中で徐々に変化した内面を意識できずにいる可能性もある。特に一度でも周囲の消極要因によって、グラフが下降線をとった学生は、以後積極要因によってグラフが上昇線をとることがあっても、内面に消極要因の影響を残している可能性はおおいにあると思われる。しかし、今回の調査ではその点についてまで言及することはできなかった。各学生の向学グラフからわかることは、学生には多様な向学スタイルがあること、そのためにひとりひとりがユニークなグラフを描くため、特定のカテゴライズが困難であること、卒論着手と同様に周囲の影響が関与していたこと、等である。

6.おわりに

今回の調査から、個人的な問題であると思われていた「卒論着手が遅れてしまったこと」が、実は多くの学生がかかえている公的問題であることが明らかになった。

第 3、4 章から、学生が卒業論文作成が遅れてしまっている公的問題の原因と思われるものがわかった。学生の多くは自身の内面の問題が主な原因であると考えているが、その裏には、周囲の人や環境の影響が関与している。それらの影響は、直接的に作成進行を妨げている場合もあるが、学生の意識を経て、間接的に行われているケースが多い。そしてその影響とは、本来学生が持っていた卒業論文作成に対する消極的な気持ちを、より強く推進する、という形で働いている場合が大半を占めるものであった。影響の与え手は、各学生によって異なるが、中でも特に、直接的に卒論進行に関わる、ゼミ友人・教授からの影

響が、多くの学生の卒論への消極性を強めている要因であると推測できる。

また第 5 章から、学生の本来持っている卒業論文作成に対する消極性は、大学生活の中で育まれてきたものなのではないか、と私は推測した。しかしこの考えを元に、インタビュー対象学生に大学生活についてのインタビューを行ったところ、あまり両者に連関があるとは思えなかった。卒業論文作成に向かって、徐々に学業意識が下がっていく学生はまれで、多くの学生が短期的な「その場」の影響や意識によって学業意識を変化させていた。しかし大学生活のインタビューの中でも、多くの学生が周囲の影響によって、意識が変容・推進されることがわかった。

本論文を進めていく中でわかったことは、学生は大学の授業、卒業論文作成に際し、周囲からの意識への影響を大きく受け、個人でそれらに臨むときとは違った反応を起こしてしまう、ということである。人間が社会的生物である限り、相互の影響なしに物事に取り組むことは困難である。同様に「卒業論文作成」も、ひとりで取り組む作業ではあるが、その際に周囲の影響を完全に遮断してしまうことは困難である。そのために「卒業論文作成が遅れてしまう」ことが特定個人の問題ではなく「一つの集団問題」として浮かび上がってくるのだろう。また多くの学生が周囲の影響の問題よりも、内面問題に目を向けやすいために、公的問題が浮き彫りにならず、私的問題として処理してしまいがちであることも、インタビューの中から実感することができた。意識しにくい公的問題を見逃し、自己の精神生活を苦しいものとしないためにも、今後は注意深く自己や他者、それに関わる社会を見つめていこうと思う。

40 字×30 行
52 ページ
原稿用紙 136 ページ

参考文献：

- C・ライト・ミルズ, 1965 年, 『社会学的想像力』, 紀伊国屋書店
- 中里至正, 松井洋, 中村真, 2003 年, 『社会心理学の基礎と展開』, 八千代出版株式会社
- 吉田俊和, 松原敏浩, 1999 年, 『社会心理学――個人と集団の理解――』, 株式会社ナカニシヤ出版